

東京学芸大学

大学史資料室報

Tokyo Gakugei University Archives journal.



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

vol. 7

目 次

8 年目が終わる今：東京学芸大学大学史資料室の現状と課題	2
川手圭一（大学史資料室室長）	
青山師範学校関係資料 解題	6
木暮絵理（大学史資料室専門研究員）	
附属幼稚園の展示とアーカイブズ ― 東京学芸大学附属幼稚園史研究序説	11
君塚仁彦（総合教育科学系教授）	
2019 年度大学史資料室展示会「遊びのなかの学び」―アンケート分析を中心に―	29
木暮絵理（大学史資料室専門研究員）	
鈴木禹志さん聞き取り調査報告	35
木暮絵理（大学史資料室専門研究員）	
令和元年度活動報告	44

8 年目が終わる今：東京学芸大学大学史資料室の現状と課題

川手圭一（大学史資料室室長）

はじめに

2012 年 5 月 31 日にオープニング・セレモニーが行われ、東京学芸大学大学史資料室が創設されてから丸 8 年が経とうとしている。小稿では、本室のここまでの歩みを振り返りつつ、その現状と課題を捉え返し、今後の大学史資料室が目指す方向の整理と、今後の本室のグランドデザインを描く上での一助としたい。なお、ここに述べることは、組織としての見解ではなく、あくまで奇しくも 2 年前から室長を引き受けることとなった筆者個人の覚書であることをお断りしておきたい。

本大学史資料室の設立の経緯については、初代室長であった藤井健志が創設時にまとめている¹。わが国における教員養成系大学の中核的大学を自負する本学において、師範学校時代に遡る教員養成の歴史を知るための史料保存がほとんどなされていないことを憂慮する学内の有志たちの手弁当によって、その歩みは始まった。

1. 大学アーカイヴズとしての東京学芸大学大学史資料室

上述した通り、本大学史資料室の立ち上げは、明治・大正期にまで遡る本学の歴史、ひいてはわが国の教員養成史に関する史料の散逸と、仮に残っているものも保存状態が劣悪なことを憂える藤井たちの努力によるものであったが、同時にこれは、全国の国立大学における大学アーカイヴズ設立の動きとも連動するものでもあった²。それは、2000 年代に入ってからの情報公開と公文書管理をめぐる法制度の整備の中で、各国立大学が対応を求められたことに関係している。2001 年 4 月に「行政機関の保有する情報の公開に関する法律（＝「情報公開法」）」が施行されると、国立大学の行政文書も情報公開の対象となり、現用文書の厳密な管理はもとより、保存期間が満了した行政文書の取り扱いが問題となった³。さらに 2011 年 4 月には、「公文書等の管理に関する法律（＝「公文書管理法」）」が施行され、これにより保存期間が満了した行政文書の移管を受けるために大学アーカイヴズは「国立公文書館等」の指定を受けなくてはならなくなった⁴。2004 年に国立大学は、国立大学法人法によって法人化され、行政文書は「法人文書」となったが、この法人文書の保存については、基本的にはこの二つの法律に基づいて、各大学が定める規定によって行政文書と同様に、その管理と廃棄、さらには保存の運用がなされている。

したがって、本室もその主たる業務の一つとして、東京学芸大学大学史資料室規定第 3 条第 1 号に、「本学の運営および教育研究等に関する重要な資料の調査及び収集」を掲げ、その実現を目指した。しかし、これについては、さまざまな困難が立ちはだかることとなった。この法人文書の保存の問題については、すでに藤井が『大学史資料室報』第 1 号のなかで、詳細にその問題点を指摘している⁵。

特に重要なのは、上記の「情報公開法」の枠組みの中で、本学においても「国立大学法人東京学芸大学法人文書管理規則（＝以下、「管理規則」と略）が 2011 年に施行されており、本学の法人文書はこの規定に基づき、厳密な管理のもとに置かれていることである。と同時に、その中にある「法人文書の保存期間基準」に即して定められた保存期間が満了した法人文書は、独立行政法人国立公文書館に移管、または廃棄していかななくてはならな

い。このように、確かに「管理規則」では、保存期間の満了した法人文書の一部を独立行政法人国立公文書館へ移管するということが示されている。しかし、現実にはその可能性はほとんどない。では、保存期間の過ぎた法人文書のなかでも、歴史的な価値のある重要な文書、記録をどのように残していくことができるのであろうか。

唯一可能な方策は、公文書管理法に即して、本大学史資料室が、「国立公文書館等」として内閣総理大臣の指定を受けることである。これにより、本室が、「管理規則」によって保存期間を満了した法人文書を受け入れることが可能となる。だが、この指定を受けることは難しく、これが本室発足以来の課題であっても、今日なお実現していない。

ところで藤井は、この点について、本室の発足にあたり、本室が総務系の事務組織に結び付けられず、図書館の下に位置づけられたことを、藤井自身の誤解ということも含めて悔いている⁶。つまり、「公文書管理法」に示される公文書の定義から除外された「歴史資料等」を保存する図書館等の下に置かれたことを問題とするのである。確かに、法律上、「公文書」は「国立公文書館等」に保存し、「歴史資料等」は図書館等に保存するように定められているというのは、その通りであろう。しかし、仮に組織上、図書館の下に位置づいていても、大学史資料室自体が「国立公文書館等」の指定を受けることができれば、保存期間が満了となった法人文書の中から歴史的価値のある史料を保存することは可能となろう。

つまり、この問題を解決するためには、本大学史資料室が「国立公文書館等」の指定を受けることが何よりも重要なのである。この間、大学史資料室は全学的に、保存期間の満了した法人文書について、大学各部署に毎年「延期」の手続きをしてもらい、これら文書の受け入れ可能となるまでの当座の対応を依頼してきた。しかし、それは限られたスペースと人員の中で、学内各部署に大きな負担を強いることとなり、2019年7月以降は、この依頼を行わないこととした。

既に述べた通り、本学の法人文書の中には、本学の教育の歴史、さらには日本の教員養成の歴史を後世の人間が知るうえで貴重な記録が多く存在する。その保存を、法的枠組みと本学が置かれている現実の中で実現することが大学史資料室の一つの責務である。他方では、「管理規則」内の「法人文書の保存期間基準」の見直しということも問題となろうが、「国立公文書館等」の指定を受けることが、何よりも重要な一歩となるのである。

2. 「師範学校アーカイブズ」の整備・発展について

本大学史資料室が、わが国における師範学校以来の教員養成の歴史に関わる史資料の収集を使命とするとき、その活動は、東京学芸大学という一つの大学の枠を超えていかざるをえない面を持つ。

本大学史資料室では、すでに「平成27年度文部科学省特別経費（プロジェクト分）—文化的・学術的な資料等の保存等—」を用いて、師範学校資料に関するデータベースである「師範学校アーカイブズ」の運用を開始している。この事業もまた、藤井ら初期の室員の活動であった。その意義と課題については、藤井健志「師範学校アーカイブズの構築とその意義」に詳しい⁷。データベース作成にあたっては、本室員が教員養成単科大学を中心に十数大学を回って関係資料を確認した。これは、さしあたり、各大学の図書館で所蔵されている図書資料のうち、OPACで公開されているもののデータベースであり、これを今後どのように発展・充実させていくかが大きな課題となる。

その一つの方向として有り得るのは、単科の各教員養成系大学が協働して「師範学校アーカイブズ」のプラットフォームを進めることではないだろうか。残念ながら、国立大学の中でも教員養成系大学の財政規模は大き

くなく、しかもその財政事情はますます厳しいものとなっている。それは、本室の事業展開にも大きな壁となって立ちはだかる。しかし、師範学校以来の教員養成の史資料収集の使命は、教員養成系大学共通のものである。したがって、それぞれの大学が自前で資料のデータベース化を進めるとともに、そのプラットフォームをオープン・アクセスによって広く利用可能なものにしていくことができれば、本大学資料室が始めた「師範学校アーカイブズ」の事業がその意義とともに次の段階へと継承されていくのではないだろうか。

大学アーカイブズの設置・整備状況は、大学によってまちまちである。しかし、本大学史資料室が附属図書館の下にあるように、さしあたり、各大学附属図書館と連動しながら、その可能性を模索していくことは、一つの有りうるべき選択肢であるように思われる。

3. 大学史関係資料の管理・保存と公開

本大学史資料室のもう一つの大きな柱は、本学の大学史関係資料の管理・保存と公開である。すなわち、本学の前身である師範学校時代からの歴史を辿る史資料を積極的に収集して、それらを管理・保存、そして公開していくことである。

本室では、設立以来、その資料の公開を目指し、資料の整備を行ってきた。その作業は、本大学史資料室専門研究員によって進められてきている。そして2019年には、東京府豊島師範学校・東京第二師範学校の同窓会組織である撫子会の「撫子会保存資料」と、「青山師範学校関係資料」の公開を始めることができた。後者は、『東京学芸大学五十年史』編纂課程で収集した資料群のうち、東京府青山師範学校・東京第一師範学校に関する資料群である。公開資料目録と閲覧案内については、本大学史資料室HPを参照願いたい。

また筆者がこれを執筆している現在、「青山師範学校関係書類」と同様に、五十年史編纂事業の資料群である「豊島師範学校関係資料」も公開に向け、作業は最終段階に進んできており、次には木下一雄初代学長資料の目録の整理・公開準備へと向かう予定となっている。

その一方で、本大学史資料室の認知度の高まりとともに、学内外から本学の歴史に関わる史資料が寄贈されている。それらの多くは、本学の卒業生・関係者が大切に保管してきたものである。

本大学史資料室は、設立以来毎年、「東京学芸大学大学史資料室展示会」を開催してきた。本年度の展示会のテーマは、「遊びのなかの学び―附属幼稚園の歩みと保育の継承―」であった。詳細については、本号における木暮絵理専門研究員の報告をお読みいただきたい。他にも新たに、「今月の学芸アルバム」という「小展示」を継続的に始めることとした。これは、本大学史資料室の事業を一人でも多くの学生・教職員、大学関係者に知ってもらい良い機会になると期待している。

おわりに

国立大学の運営費交付金が厳しい状況にあるなかで、本大学史資料室の事業も、そこに頼るだけでは厳しい。そのなかで、本大学史資料室の使命と役割を学内外に示して理解を求めつつ、新たな事業展開を進めるためには、外部資金の獲得など、さらなる知恵と工夫が必要となる。

設立から8年目が終わる今、藤井健志初代室長が定年退職される。その志を引き継ぎつつ、私たちは、東京学

芸大学大学史資料室を次のステージへと進めていかなければならない、と思う。

注

- 1 藤井健志「大学史資料室—これまでとこれから—」『大学史資料室』（2012年6月20日）、p.2；藤井健志「大学における資料保存の意味と意義」『大学史資料室報』vol.1, 2014年3月）、pp.1f.
- 2 君塚仁彦「大学アーカイヴズをめぐる全国的状況」『大学史資料室』（2012年6月20日）、p.3.
- 3 菅真城『大学アーカイヴズの世界』（大阪大学出版会、2013年）、p.117. 本稿では、引用文献タイトル等ですでに示されているもの以外では、原則「アーカイヴズ」と表記している。
- 4 前掲書、p.2, 119.
- 5 藤井「大学における資料保存の意味と意義」、p.4ff.
- 6 前掲論文、p.6f.
- 7 藤井健志「師範学校アーカイヴズの構築とその意義」『大学史資料室報』vol.3, 2016年3月）、pp.1-7.

1. はじめに

『青山師範学校関係資料』は、東京学芸大学が『東京学芸大学五十年史』を編纂するにあたり収集された資料群『東京学芸大学五十年史資料目録』のうち、東京学芸大学の前身校の一つである東京府青山師範学校に關係するものである。総点数は648点にのぼり、年代を確認できる最も古いもので1901年（明治34年）のものから、1951年（昭和26年）に東京学芸大学発足に伴う閉校までの半世紀にわたる資料が確認できる。東京府の公立師範学校であった青山師範学校の姿をうかがうことができる貴重な資料といえよう。それだけではなく、青山師範学校が東京府における公立の教員養成学校であったという性質から、東京府内の尋常小学校に関する資料等も残されており、師範学校に限らない教育史に関する研究にも有用であろう。

本資料群には、いわゆる東京府青山師範学校時代（1908年～1943年）のみならずその前身である東京府師範学校時代、また1943年（昭和18年）発足の東京第一師範学校時代の資料も含まれている。そのため、厳密には『青山師範学校関係資料』とは呼称できないのかもしれない。ただし資料群の8割程度が青山師範学校関連の資料と考えられることなどを考慮し、『青山師範学校関係資料（以下、『青師資料』と略す場合がある）』と名称することとした。

2. 『東京学芸大学五十年史資料』と『東京学芸大学五十年史資料目録』の概要

『東京学芸大学五十年史資料目録（以下、『五十年史目録』とする）』は、令和2（2020）年2月に大学史資料室が新たに公開・閲覧を開始した『青師資料』の母体となっている資料群である。

東京学芸大学は来る2023年に創基150年を迎える。これは、明治6年（1873年）の東京府小学校教則講習所の設立から数えたものとなる。その後、東京府小学校教則講習所は青山師範、東京第一師範と姿を変え、昭和24年（1949年）に東京第一師範学校に加え、第二、第三師範学校、及び東京青年師範学校を母体として国立の新制大学、東京学芸大学が発足した。

この昭和24年を起点として50年目にあたる平成11（1999）年には東京学芸大学創立50周年の記念事業の一環として、『東京学芸大学五十年史』が編纂、刊行された。昭和45（1970）年には『東京学芸大学二十年史』が刊行されており、『五十年史』は東京学芸大学としては2冊目の大学史となる。『二十年史』は「創基九十六年史」と副題されており、東京学芸大学前史である師範学校時代についてかなりの紙面を割いている。「東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会」はそれをふまえ、『五十年史』に関する新たな編集方針を定めた。以下、若干長くなるがそれを引用する。

- （一）この『東京学芸大学五十年史』は、通史編と資料編の二分冊とし、いずれも単なる東京学芸大学五〇年のあゆみではなく、その背景にある戦後教育史、あるいは戦後教員養成史と関連させつつ記述、ないしは資料を選択する。

- (二) 一九七〇（昭和四五）年発行の『東京学芸大学二十年史』は、そのサブタイトルに「創基九十六年史」とあるように、かなりのページを割いて本学の前身の師範学校の歴史を懇切に記している。その重複を避けるため、『東京学芸大学五十年史』では、文字どおり大学となってからの五〇年のあゆみを詳述し、師範学校時代について、補章において大学前史として略述する。
- (三) 東京学芸大学の五〇年というあゆみの中には、わが国における戦後教育や社会情勢の大きなうねりに揺り動かされつつ、その上に本学なりの固有の事情による移り変わりがあった。すなわち、一九四九～六三年の整備・統合期、一九六四～七五年の拡充・発展期、一九七六～八六年の展開期、一九八七～現在の転換期、の四つの画期である（詳細は序章第二節参照）。もちろん、この画期はおおまかな動向であり、ここに示した年次も絶対的な数字ではなく、その年次の前後あたりというおよその目安の数字である¹。

また、編集委員会の委員長であった竹内誠は編纂過程で収集した資料について以下のように述べている。

とかく歴史編纂が終了すると、編纂過程で収集した資料が散逸するという事例をしばしば聞くことがある。そうしたことのないよう本編集委員会では、収集した資料をとりあえず附属図書館で一括して保存していただくようお願いした。今後こうした資料等をも含めて、東京学芸大学に教育資料館を設置しようという気運が醸成されるならば、望外の喜びである。

この言葉通り、『五十年史関係資料』は附属図書館に保管されていた。しかし、残念ながらそれを整理、活用するということまでには至らなかった。

その後、2010年頃から本学内の有志の教職員によって資料の救出活動が始まり、『五十年史』に関してもその際に大学史資料室に図書館から移されたのである²。

3. 東京府青山師範学校について

ここでは、東京府青山師範学校の歴史について、その歴史を概観していく。東京府青山師範学校の学校史については、青山師範学校監修の1936『創立六十年青山師範学校沿革史』と東京学芸大学二十年史編集委員会編1970『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史』に詳しく、本稿でもその2冊をおおいに参考にしている。

東京学芸大学の歴史は、明治6（1873）年4月、府庁構内旧町会所長屋跡に「小学教則講習所」を開設したことに始まり、また、これが東京府青山師範学校の始まりでもある。小学教則講習所は現職教員を対象とした教則の講習を主たる目的に設置されたものであった。それが教員を養成するための機関である師範学校となったのは、「東京府小学師範学校」が開校した明治9（1876）年3月のことである。同年11月には「東京府師範学校」と改称し、「小学師範」のみならず「中学師範」「女子師範」の養成も目指す形となった。

ところが、中学師範は結果的に設置されることなく、女子師範も数年間でその養成を停止してしまった。それにかわって多く募集されたのが速成生である。速成生は、6か月程度の短期間で教員を育成するいわば急場ごしえの教員養成であった。教員の需要増加に伴い、正式の師範生以上に速成生が要望されていたという。

明治10年代後半の速成生養成中心の時期を脱すると、徐々に中等科、高等科教員の本格養成に移行しはじめる。明治20（1887）年には一度「東京府尋常師範学校」と改称し、文部省の意向に従って新たな諸規定を定め

た。また、明治 22（1889）年には創設の地であった内幸町から小石川区竹早町へ移転している。

明治 30（1897）年、師範学校令に代わり師範教育令が実施された。それに伴い翌明治 31（1898）年には校名を再び東京府師範学校に戻した。明治 33（1900）年 8 月から翌明治 34（1901）年 4 月にかけて、東京府師範学校は竹早から赤坂区青山北町の新校舎へ移転した。

明治 41（1908）年 4 月に「師範学校規程」が施行されると、東京府師範学校では本科第二部の授業が開設された。これは、師範学校への入学に際し、中学校（女子は高等女学校）卒業を入学資格とするものである。この規程は当初その修業年限を 1 年間としていたが、大正 6（1917）年には 2 年間と定められた。さらに昭和 18（1943）年に師範学校が専門学校のひとつに位置づけられ、入学資格はすべて中等教育修了となり、戦後の新制大学昇格への出発点ともいえるものになった。

時代は戻り明治 41 年 11 月 14 日、府は「東京府豊島師範学校ヲ北豊島郡巢鴨村字池袋ニ設置シ明治四二年四月ヨリ開校ス」と告示した。それに伴い東京府師範学校は「東京府青山師範学校」と改称した。明治 42（1909）年 1 月には豊島師範と合同で生徒募集を行い、青山師範には本科第一部第二部併せて 60 名程度の入学者があった。

大正 9（1920）年になると豊島師範と合同で行ってきた生徒募集をそれぞれ単独で行うようになった。

大正 15（1926）年から青山師範学校の改築・移転の議論がはじまり、昭和 7（1932）年には現在も附属高校が置かれている世田谷区下馬に移転することが決定した。地元住民の反対活動等もあり、2 年後の昭和 9（1934）年になって工事が始まり、すべての工事が完了したのは昭和 11（1936）年 9 月のことであった。それに先んじて昭和 11 年 3 月に本校舎と寄宿舎が竣工していたため、青山師範学校は昭和 11 年 4 月に下馬に移転したのである³。

昭和 18（1943）年 4 月に施行された勅令第一〇九号によって師範教育令の改正が行われた。これによって師範学校はすべて都道府県立から官立に移管され、東京府師範学校も東京第一師範学校男子部となった。開校から 2 か月後の昭和 18 年 6 月には勤労働員が開始され、同年 9 月には理工系及び師範系を除く学生・生徒の徴兵猶予が撤廃された。昭和 20（1945）年 3 月には召集規則が改められたことによって師範学校の学生も兵役に就くことになった。また、教員の応召者も多かったという。

戦後、東京第一師範学校はカリキュラムの改訂に伴う学生・現任教員の再教育などを担ったが、昭和 24（1949）年に新制大学東京学芸大学の発足に伴い、昭和 26（1951）年 3 月に閉校した。

4. 『青山師範学校関係資料』の概要

『青山師範学校関係資料』には、前述のようにその前身である東京府師範学校時代、また 1943 年（昭和 18 年）発足の東京第一師範学校時代の資料等も含まれている。年代を確認できる最も古い資料が 1901 年（明治 34 年）のものであり、これは青山師範学校及びその前身校等の歴史を辿るうえで重要なものであることは、間違いない。

この資料群は、『五十年史』を編纂する際の資料として収集されたものであるが、すべての年代について網羅しているわけではなく、収集する際にもうけられたテーマを見出すこともできない。当時、東京第一師範学校が閉校してからすでに 50 年が経過しており、体系的に新たに資料を収集することは難しかったであろう。そのため、おそらく『二十年史』を編纂する際に収集された資料群を補完する形で資料を収集したと考えられる。

『青師資料』の資料はもともと年代ごとの整理などはなされていなかった。特定の行事やテーマ、元の所有者毎に小さな資料群がつくられ、それに入らない他の細々した資料が合わさった形で資料群が構成されている。これは、昨年（2019年）2月に公開された『撫子会保存資料』とは収集と整理の状況が異なったためであると考えられる。

『撫子会保存資料』に関しては小正 2019⁴ に詳述しており、本文の趣旨とずれるためにここでの詳述は避ける。東京府豊島師範学校・東京第二師範学校の同窓会組織である撫子会が収集した資料群であり、同窓会によって既に分類・整理がなされていたことをここに記述しておくだけにしよう。それとは異なり『青師資料』は、大学史を編纂する際に大学事務を中心として、言葉を選ばずにいえば雑多に集められた資料群である。推察するに入手経緯やその行事等に従って封筒に収められ、保管・利用されていたのではないだろうか。その際に作られた封筒は現存しているものもあれば、複数の異なる小資料群が後からまとめて別の封筒に入れなおされているものもある。残念ながら封筒に書かれている資料が現存していない場合もままある。

以下、特徴的な小資料群をいくつか紹介していきたい。

① 祝賀行事に関する資料（創立 50 年、創立 60 年）

青山師範学校創立 50 年と同 60 年の際に行われたそれぞれの祝賀行事に関する資料。祈念式及び祝宴会を行うに当たっての各係の分担表、予算、事業費用の内訳、挨拶状の下書き等。

② 運動会に関する資料

西海龍蔵あるいは西海という署名が散見されることから、大正 9（1920）年から昭和 9（1934）にかけて青山師範学校体育科の教諭を務めた西海龍蔵が収集した資料と考えられる。西海は東京府体育研究会の理事長を務めるなど体育界の重鎮であったため、附属学校の運動会のみならず、様々な尋常小学校の運動会の案内状やプログラムが収められている⁵。

③ 校友会に関する資料

校友会発行の校友会誌「校友」や校友会活動に関するメモ書き等。

④ 世田谷移転に関する資料

大正 15 年から昭和 11 年にかけての移転に関する資料群。新校舎の図面、新校舎の各教科の教室案、各室配置案、移転の際の物品の搬入要覧、移転当日の人の配置等。

⑤ 戦争時に関する資料

戦争時における師範学校と学生の状況が読み取れる貴重な資料が収められている。学徒勤労動員の出勤状況や勤労報国隊に関する規程、戦争死亡保険、戦死の記録等。

5. おわりに

『青山師範学校関係資料』には、師範学校史に関する資料だけではなく、日本教育史・日本体育史・日本近代

史等に関する資料も多々含まれている。本学関係者や師範学校史に関係する研究者ばかりでなく、広くこの資料群が利用されることを願っている。

一方、この目録は現在資料室の HP 上で公開されているが、検索機能がなく、課題も山積している。今後、この貴重な資料が広く利用されるために、目録等の公開の方法を再検討する必要があるだろう。

注

- 1 竹内誠 1999「刊行にあたって」東京学芸大学創立五十周年記念誌 編集委員会編『東京学芸大学五十年史 通史編』（ページ数なし）
- 2 この経緯については大学史資料室発起人の一人である藤井健志氏による 2012「大学史資料室—これまでとこれから—」（<https://www.u-gakugei.ac.jp/shiryoshitsu/history/>）、同藤井健志 2014「大学における資料保存の意味と意義」『東京学芸大学大学史資料室報』1、pp.1-10 に詳しい。
- 3 長谷川乙彦 1937「我が校新築移転の経過について」『校友 第二十二号 創立六十年／新築落成記念号』東京府青山師範学校々友会、pp.1-5
- 4 小正展也 2019「撫子会保存資料 解題」『東京学芸大学大学史資料室報』6、pp.9-14
- 5 1931『校友 第十七号』東京府青山師範学校々友会

附属幼稚園の展示とアーカイブズ ― 東京学芸大学附属幼稚園史研究序説

君塚仁彦（総合教育科学系教授）

1. 問題意識と本稿の目的

東京学芸大学大学史資料室では、毎年、前身の師範学校時代を含めた大学の歴史に関する展示会を開催している。2018年度には、初めて附属学校園をメインテーマとする展示会を開催し、大学と同じ小金井キャンパス内にある附属小金井中学校を取り上げた。

学部や大学院と協働する教育実習の場、また教育研究の場としての附属学校は東京学芸大学にとって大きな意味を持っている。しかし、急激な社会変容を背景に、国立教員養成大学や教育学部は自らの存在意義や学術的・社会的な役割を改めて明確にする必要に迫られており、附属学校園もその例外ではなくなっている。附属学校園で積み上げられてきた独自性に富む質の高い教育実践をアピールすることはもちろん、全国あるいは地域のモデル校としてのミッションをより明確化することなど新たな社会的役割も求められている。

近年、財政難や構造的な人口減少、少子化による子どもの減少などの社会的要因を背景に、政治主導で本学をはじめとする教員養成大学・教育学部が大きく変容していく中で、歴史資料を通して附属学校園を紹介し、その存在意味や歴史的意義を考える機会を提供することは、アーカイブズ機能と共に行うべき本資料室の大切な作業であると考ええる。

そこで、室員会議での検討を経て、昨年度に続き2019年度も附属幼稚園小金井園舎の歩みをメインテーマとする展示会を企画することになった。企画担当者である筆者が2018年度より附属幼稚園長を兼任していることが契機としてはあるものの、園長として直面した幼稚園史資料保存問題の難しさや、非認知能力の育成などの点で国際的に再評価されつつある幼児教育そして附属幼稚園に対する学内理解のあり方、そして近年注目されつつある「学校アーカイブズ論」のあり方に対する問題関心なども展示会開催の大きなモチベーションになっていた。

幼稚園は、学校教育法第1条に「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする」と規定されているように、いわゆる「一条校」である。にもかかわらず、明治期における導入時点でフレーベルのKindergarten（キンダーガルテン）の考え方に基づき「学校」ではなく「園」と称したことや、遊びや作業を中心とする学びを基調とする独自の教育理念や方法などから、現在に至るまで小学校以上の関係者との認識の溝は小さくない。

そのことに影響されていると思われるが、幼稚園は「学校アーカイブズ」論という枠組みからも見落とされがちであったことは否定できず、現状において幼稚園アーカイブズに対する認識は低調であると言わざるを得ない。

幼稚園の歴史研究については、文部省による通史をはじめ、いくつかの重要な成果がある。しかし、日本の幼児教育史・幼稚園史については、1876（明治9）年に日本で初めて設置された園である東京女子師範学校附属幼稚園（現、お茶の水女子大学附属幼稚園）を中心に描かれることが多く、管見の限りでは、本学附属幼稚園のような師範学校附属の園についてはあまり取り上げられていないようである。⁽¹⁾ 他方、地域社会の成り立ちと幼児教育との関係性を明らかにしようとすることを目的に幼稚園や保育園をテーマに取り上げる地域博物館も出てきている。これらは、博物館における幼稚園アーカイブズ、保育園も含めた幼児教育関係資料への着目と活用という点で、注目される事例である。⁽²⁾

以上の問題意識を踏まえて、本論では、2019 年度展示会「遊びのなかの学び—附属幼稚園の歩みと保育の継承」について、展示会場やパンフレットでは伝えきることができなかった開催の経緯、特に伝えなかったいくつかのポイント、展示会を通して見出された課題と今後の展望について述べていくことを目的とする。

今後、2023 年の東京学芸大学創基 150 周年に向けて大学史資料室がなすべき課題も徐々に増えていくと思われるが、あくまでも展示会の解題と補説に近い内容にすぎない小論の副題を敢えて「東京学芸大学附属幼稚園史研究序説」としたのは、東京学芸大学附属幼稚園を構成する竹早園舎・小金井園舎の歩み、そしてその歴史的・教育的な意義を明らかにするトータルな附属幼稚園史の必要性を痛感したからであり、本展示会を附属幼稚園史研究のゼロキロポストとすることを意図しているからである。⁽³⁾

2. 展示会開催の経緯と背景—幼稚園史資料保存の難しさ

日々、3 歳から 5 歳クラスまでの幼児たちの歓声が響き渡る附属幼稚園の保育活動、遊びを通して環境からさまざまなことを学ぶことを大切にする躍動感あふれる幼児教育の歩みを「展示」という形で表現することの難しさは当初から容易に予想できた。一般的に展示は静的なメディアであり、幼稚園教育とは真逆の性質を持っている。

それでもなお、附属幼稚園を展示しようと意図したのは、いくつかの背景と経緯がある。展示会場入口部分に「この展示会に来てくださった皆さまへ」と題したパネルを置いた。園児が描いた絵を使いデザインしたパネル【図 1】に、以下のメッセージを書き込んだ。

皆さんは、小金井キャンパスに東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎があるのをご存知ですか。晴れた日の午前、東門に向かって歩いていくと、子どもたちと先生の笑い声を乗せたさわやかな風が流れてきます。活き活きした子どもたちの風景は、キャンパスに素敵なアクセントを与え続けています。附属幼稚園は、1904（明治 37）年、東京府女子師範学校に設置されたのが始まりです。1957（昭和 32）年、大学的小金井キャンパス統合からは、竹早園舎と小金井園舎の 2 園舎体制で保育を進め、一貫して遊びを通した学びを理念に保育を創造してきました。このたび、大学史資料室では、今日まで優れた幼稚園教諭や研究者を全国に輩出し、地域の子どもたちに創造性あふれる保育を提供し続けてきた附属幼稚園を取り上げ、その基本的な教育観である「遊びのなかの学び」をテーマに展示会を開催します。非認知能力の育成などの点で改めてその重要性がクローズアップされている「遊びのなかの学び」の姿を、昔と今の子どもたちの写真や資料から見て、感じていただきたいと思います。そして、それを支える先生たちや保護者の思いも見いただければと思います。

この展示会を通して附属幼稚園の歩みを知っていただくことも大事ですが、ぜひ、幼児教育の面白さと奥深さを感じ取ってください。

博物館で展示会を企画する際には、来館する見学者のターゲットをどこに置くかを検討することが一般的であるが、今回の展示会のメインターゲットの一つは本学教員と学生であった。大学教員との合同研究会などはあるものの、附属学校園は学内でも業務上あるいは教育実習で自らが関わりを持たない限り、その教育活動や理念を知る機会はない。ましてや国内有数のエリート進学校がほとんどである本学附属学校園の中で、附属幼稚園とりわけ「庶民の幼稚園」を標榜してきた小金井園舎は異色の存在であり、小金井キャンパス東端の目立ちに



【図1】



【図2】

くい場所にあるためか、その存在自体を知らない者も少なくない。

メッセージパネル1行目からの最初のパラグラフはそのことを念頭に置いて書かれている。実際、今回の展示会で初めて附属幼稚園の存在を知ったという学生も多く、都心に位置する竹早地区と小金井地区に2つの園舎があることを初めて知ったという教員もいた。

メッセージパネルと共に、入り口部分には、小金井園舎で撮影された保育中の子どもたちの活き活きとした姿を写した写真をコラージュし、幼稚園の雰囲気を感じてもらえるように工夫した。【図2】

今回の展示会は、後述する経緯があり小金井園舎が中心となったが、歴史的には圧倒的に竹早園舎のほうが古く、国内では最古の部類ではないものの、その始原は日露戦争勃発時の1904（明治37）年に設立された東京府師範学校附属幼稚園にまで遡る。小金井園舎が開設されるのは、1957（昭和32）年にタコ足だった大学キャンパスを小金井に統合したことに伴い、園児定員30名を移動したことによる。その歴史的経緯を「附属幼稚園のはじまり」としてまとめたのが【図3】のパネルである。そして、明治大正期における「幼稚園政策の展開と東京府女子師範学校附属幼稚園」のパネル2枚で当時の政策の流れを説明し、附属幼稚園（竹早園舎）の保育活動を撮影した貴重な写真を紹介し、明治・大正期の歴史資料数点を幼稚園アーカイブズとして展示した。紙幅の都合上その詳細は省略する。

附属幼稚園のはじまり

日本の幼稚園教育は、1876(明治9)年に東京女子師範学校附属幼稚園(現、お茶の水女子大学附属幼稚園)の創設により本格的にスタートしました。

明治政府による小学校優先政策で幼稚園設置は後手に回りますが、1884(明治17)年、文部省から小学校へ入学しようとする子どもに対して幼稚園の教育方法による保育を行うよう通達が出され、各地で公立幼稚園が次々と設立されました。



新園舎開設当初の園庭で遊ぶ子どもたち 1936(昭和11)年
附属幼稚園竹早園舎所蔵



東京府女子師範学校 東京第一師範学校女子部之碑
竹早地区附属学校園敷地内

明治30年代からは東京・大阪の都市部で私立幼稚園の設立が増えますが、その流れの中、1904(明治37)年に東京市小石川区竹早町に設立されたのが、本園の前身である東京府女子師範学校附属幼稚園です。

1876(明治9)年に東京府師範学校附属小学校が創設されますが、1900(明治33)年には東京府女子師範学校附属小学校が開校します。その4年後に小学校内に開設されたのが附属幼稚園です。

1943(昭和18)年には東京第一師範女子部附属幼稚園と改称され、戦時中の休園期間を経て、戦後、1946(昭和21)年には附属小学校内で幼稚園を再開しました。

その後、1949(昭和24)年に東京学芸大学東京第一師範学校附属幼稚園となり、1951(昭和26)年に東京学芸大学附属幼稚園と改称されました。

1957(昭和32)年、東京学芸大学は小金井にキャンパスが統合されます。それに伴い、幼稚園の園児定員30名が小金井に移され、その後は附属幼稚園竹早園舎と小金井園舎の2園舎体制で運営されることになりました。

2019(令和元)年に、竹早園舎は創設115周年、小金井園舎は創設62周年を迎えました。国内有数の歴史ある幼稚園であることは言うまでもありません。特に、古い歴史を持つ竹早園舎には、大正・昭和戦前期の保育の様子を撮影した古い写真、保育・教育実習に関する歴史的な記録資料類が大切に保管されており、全国的に見ても、貴重な幼稚園アーカイブズの一例であると言えます。

次に展示会開催の経緯について述べよう。直接のきっかけは、小金井園舎管理棟改修工事に伴うある資料群の取り扱いについての議論であった。それは、小金井園舎管理棟内にある会議室で保管されていた PTA が作成した園内行事を記録した写真アルバム類で、会議室のキャビネットに年代順にきちんと整理されていた。全部で段ボール箱 11 箱分の分量があった。昭和 30 年代から 50 年代までの間、デジタル化の波が来るまでの幼稚園保育活動の貴重な記録資料であると考えられ、国内での類例資料の保存例があまりないことも確認し、園として保存すべき資料であると考えた。【図 6】

この資料群の詳細については別稿を期すつもりであるが、数か月後に管理棟改修工事が入るため、資料をどこかに移動させなければならなくなった。管理棟は狭隘なため一時保管の場所も他に見つからない。大学史資料室も収蔵庫は非現用公文書の保管でほぼ飽和状態になる見込みであるという。やむなく廃棄するしかないとの意見まで出たため、園長が一時的に預かり保管する形を取ったが、廃棄意見を一概に責めることはできない。

園長として、また園として優先すべきは日々の保育活動と子どもたちの成長と安全安心を保障することであり、歴史的資料の保存はその次の仕事になる。しかし、園運営全体のガバナンスも園長にとって大切な職務であり、今回はその一環としての歴史的資料・情報管理作業として本資料の保存活動を位置づけ、このような形を取るに至ったのである。

この一件は、幼稚園アーカイブズ保存の難しさを痛感する出来事であったが、そもそも幼稚園を含む学校は資料保存公開のための機関ではなく、一般的にはそのための施設設備もない。全国には学校園年史事業の際に設置される記念室や資料室なども見られるが、何らかの事情で博物館ないしは資料館的な機能が整備されない限り、継続的な歴史的資料の保存管理、ましてや個人情報保護の観点から公開機能を有することは難しい。

展示会では資料群のほんの一部を展示したが、PTA が作成した園内行事の手作りのアルバム類は園と保護者の強いつながりや一体感がなければ作り続けられることはなかったであろう。

【図 4】はアルバムの表紙であるが、1 冊 1 冊が手作りであり、整理して貼り付けられている写真を見ると幼稚園の教育理念や方針に対する深い理解、そして何よりも子どもたちに対する深い愛情が溢れるページばかりであった。作りこまれた表紙から伝わるものを感じてもらうため、詳しいキャプションを示さずに展示した。【図 5】



【図 4】



【図 5】

3. 元副園長・西澤幸子先生と「小金井園舎アーカイブズ」、小金井園舎の変遷

【図6】の展示パネルに記したように、今回の展示会は、小金井園舎草創期に副園長として活躍された西澤幸子先生が大切に保管されてきた貴重な資料、そして調査によって得られたオーラルヒストリーがあってはじめて開催できたと言っても過言ではない。

西澤先生は、幼稚園教諭として、1957（昭和32）年から1977（昭和52年）までの長きにわたり、小金井園舎のために創造あふれる保育と研究活動を、そして副園長として園舎運営のために多大な努力をされてきた方である。附属幼稚園 OG・OB 会組織である「ふよう会」で園長としてお会いし、そこで今回の展示企画についてお話しする機会を得られたことが実施に向けての大きなモチベーションになった。

前述したように、幼稚園現場は、日々、幼児や保護者を相手に教育活動を展開しているため、日常の保育や研究を記録した歴史的資料を組織的に保存し、活用するという点に弱みがある。そのため保育指導案や教材研究の資料などの教育資料は研究資料化された一部を除いて残されることは稀であり、多くは個人が意図をもって保管する形になる。

この点も別稿を期すことにするが、西澤先生からは寄贈いただいた小金井園舎の保育・研究資料は、昭和32年以降から昭和40年代のものが中心で、幼稚園史の研究者に確認したところ、この時期の幼稚園教育資料をまとめた形で個人保管されていた事例は珍しく、大変貴重なケースであることが分かった。

「小金井園舎アーカイブズ」ともいべき貴重な資料を残された西澤先生は、小金井園舎時代について、『創立60周年記念誌』に「共に育った時代」という一文を寄せ、次のように述べている。⁽⁴⁾

小金井地区に、地域に根差した附属幼稚園を設立しそこで常に幼児の姿を見ながら学ぶ教員養成コースをと、教育学・教育心理学教官の願いを基底にして実現した附属幼稚園。私が在職した20年間は、まさに波乱万丈の時代を経過していたのだが、開園当時より担任した子ども達と過ごした日々は、まさに生き生きとした活力に溢れたものだった。

まだ、室内遊具も無い中、屋外で身体を動かす遊びを中心にして、自然の中での保育を充実させた日々…大学構内に居るヤギに草を食べさせたり、農場で芋掘りをしたり、附属金中の運動会・大学学園祭に参加・東久留米成美荘での合宿保育など、これらの活動は、保護者の方々や大学教官・学生の協力による“子どもへの愛の共有環境現場”であったと言える。

あれから60年の時を経たが、これからも地域の中で生き生きと本来の幼児教育を率先して行う附属幼稚園であることを、心から願っている。

西澤先生が「波乱万丈」と表現されているように、草創期の小金井園舎が苦労の連続であったことは、さまざまな記録から読み取ることができる。これまで小金井園舎では、その歩みを記したいくつかの刊行物が出されているが、展示会準備段階では、1977（昭和52）年に出された『小金井園舎20年のあゆみ』（東京学芸大学教育学部附属幼稚園発行）の時期区分をもとに園舎の変遷を歴史的に跡付ける作業を行った。

『小金井園舎20年のあゆみ』には、本学幼稚園科教授であり、1957（昭和32）年から附属小金井中学校に附設されていた時期の小金井園舎を運営委員として支えた角尾稔先生の言葉が残されているが、小金井園舎20年の歴史は「実態と帳簿のくいちがいの是正の歴史」だと指摘する。「園児数は小金井に移っているのに、クラスは移していないといわれたり」、「建物はいつまでも園舎として帳面にのせられない建物であったり」、「園長は任

小金井園舎元副園長・西澤幸子先生と幼稚園資料

今回の展示会は、小金井園舎草創期に副園長として活躍された西澤幸子先生が大切に保管されてきた貴重な資料とお話があつてはじめて開催できたと言っても過言ではありません。

西澤先生は、幼稚園教諭として、1957(昭和32)年から1977(昭和52年)までの長きにわたり、小金井園舎のために、創造あふれる保育と研究活動を、そして副園長として園舎運営のために多大な貢献をされました。

教育史研究、とくに学校史研究のなかでも、幼稚園史料はあまり注目されない傾向があるようです。また、幼稚園が日々の保育や研究を記録した歴史的な資料を組織的に保存し、活用するということもあまり見られません。毎日、子どもたちのために保育活動に、精一杯、力を尽くされている先生方です。無理ありません。

今回、西澤先生からご寄贈いただいた小金井園舎の保育・研究資料は、昭和32年以降から昭和40年代のものが中心ですが、この時期の幼稚園資料を個人で保管されていた事例は珍しく、大変貴重な資料であると言えるでしょう。(写真上)



下の写真は、小金井園舎で保管されていたPTAが作成した行事のアルバム類です。手作りのアルバムが会議室のキャビネットに年代順に整理されていました。昭和30年代から50年代までの間、デジタル化の波が来るまでの貴重な記録資料であると思われます。

【図6】

命されたのに園長印をされず怒りたくなったり、水道用地を運動場にするということで許可がおりた新園舎なのに、いつまでもそのままだったり」と書いているのもわびしくなるようなことが余りにも多すぎたと述べているが、これらの点は西澤幸子先生からの聞き取りでも確認することができた。

小金井園舎の変遷については、「附属小金井園舎のあゆみ」として以下の4つに時期区分しそれぞれをパネル化した。

- ① 附属小金井中学校とともに、初代園舎時代
- ② 附属小金井小学校間借り時代
- ③ 初代新園舎時代
- ④ 2代目新園舎時代のスタート

以下、【図7】から【図11】として展示パネルを参考資料として掲載するが、小金井園舎の基本理念と教育方針を明確に表しているのが、1958（昭和33）年から1963（昭和38）年まで、現在の園長にあたる園舎主任を務めた松原元一先生の次の文章である。『小金井園舎20年のあゆみ』には以下のように記されている。⁽⁵⁾ 各時期の歴史については、パネルの記述を参照されたい。【図11】「園内図の移り変わり」は、保育室の位置や園庭のあり方や保育観を研究する上でも貴重な情報を与えてくれている。

当時、国立の各大学の附属学校といえば、特殊な学校であった。古い時代の附属学校はいろいろな意味で伝統的に貴族的な学校であった。しかし、小金井園舎は庶民の幼稚園に徹しようという、優れた見解のもとで創立されていた。そのため、厳重な地域制を布いて寄留は一切認めなかった。

入園のためのテストは実施したが、（中略）失格したものはほとんどなく、抽選で入園者を決めていた。できるだけ費用のかからない幼稚園にしようとして、国庫へ納める保育料の他はPTA会費など安かったので、親の方が驚いたほどであった。

親たちは私が面接した。それは次の3つのことを念をおすためであった。

第1は、附属小学校へ優先的に入学はできないことで、他の幼稚園と全く同格であると思ってほしいこと、これにはがっかりした親たちもいたようである。

第2に、特殊な小学校へ入学するための準備は一切しないこと、この幼稚園で考えたとおりに実施するから、他の園とは異なったやり方もあること。第3に、学生の観察、参加、実習があることを含んでほしいということであった。

地域外に住んでいる大学の職員で入園を断られて不満であった人もいた。益田先生（引用者注、小金井園舎教諭）の子息が抽選で失格したとき、PTAの1人の母親から、先生の子どもは特別に入園すべきであるとねじ込まれたこともあった。

今から考えると当然と思われる数々のことが問題となったものである。このように、創設者たちの先見の明を守り抜くために、小金井の庶民幼稚園づくりには苦労が多かったのである。

「大変でしたね、お疲れ様でした」、と思わず声をかけ
たくなるのが草創期の小金井園舎の歩みです。

1957(昭和32)年4月に定員30名を竹早から移し、7月に
附属小金井中学校内に陸軍技術研究所時代の兵舎を転
用した小金井園舎が誕生します。1963(昭和38)年3月ま
では附属中学校に附設され運営されていました。

写真1は、初代小金井園舎の写真です。後方には建設
中の時計台と当時の附属図書館(現在の人文社会2号
館)が見え、園舎の後は菓子工場の一部が見えます。
学内に民間のお菓子工場があったなんて驚きですが、周
围にはお菓子の材料にしたのでしょうか、あんずの種が
たくさん落ちていたそうです。

もともと兵舎だった建物を保育室に改装したものです
から、この時期の保育にはさまざまな不便と苦労があった
ようです。また、『小金井園舎20年のあゆみ』(1977年)を見
ると、附属幼稚園に対する学内の理解もまだ十分ではな
かったようです。歴代の園長先生が運営面でさまざまな苦
労をされた話が残されています。写真2をご覧ください。な
らば、その苦労も少しは分かるような気がしませんか。



写真1



写真2

そして、何よりも、小金井園舎に対する学内や地域の理解が問題でした。当時の附属学校の常識では理解されにく
い方向性を示していたからです。それは、1958(昭和33)年から1964(昭和39)年まで、現在の園長にあたる園舎主
任を務めた松原元一先生の『小金井園舎20年のあゆみ』に記された言葉に象徴されています。先生は、小金井園
舎の基本方針が稲毛卓先生、角尾稔先生など教育学や教育心理学関係の大学教員により考えられたものであると
述べたうえで、以下のように書き記しています。

当時、国立の各大学の附属学校といえば、特殊な学校であった。古い時代の附属学校はいろいろな意味で伝統的
に貴族的な学校であった。しかし、小金井園舎は庶民の幼稚園に徹しようという、優れた見解のもとで創立されてい
た。そのため、厳重な地域制を布いて寄留は一切認めなかった。

入園のためのテストは実施したが、(中略) 失格したものはほとんどなく、抽選で入園者を決めていた。できるだけ
費用のかからない幼稚園にしようとして、国庫へ納める保育料の他はPTA会費など安かったので、親の方が驚いた
ほどであった。親たちは私が面接した。それは次の3つのことを念をおすためであった。

第1は、附属小学校へ優先的に入学はできないことで、他の幼稚園と全く同格であると思ってほしいこと、これには
がっかりした親たちもいたようである。第2に、特殊な小学校へ入学するための準備は一切しないこと、この幼稚園で
考えたとおりに実施するから、他の園とは異なったやり方もあること。第3に、学生の観察、参加、実習があることを
含んでほしいということであった。(中略)

今から考えると当然と思われる数々のことが問題となったものである。このように、創設者たちの先見の明を守り
抜くために、小金井の庶民幼稚園づくりには苦労が多かったのである。

1961(昭和36)年9月から1964年(昭和39)年の間、キャンパス内の建物が整備されていく中で、小金井園舎は附属小金井小学校の片隅で間借り生活することになりました。

女性教諭3人体制での引っ越しは大変な苦勞だったようで、間借り生活なので、保育を進める上で思うような環境設定もできなかったといえます。



間借り園舎のテラスで木工遊びをする子どもたち

1964(昭和39)年10月



園庭でリズム遊び

1963(昭和39)年9月

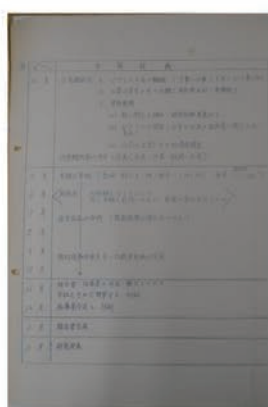
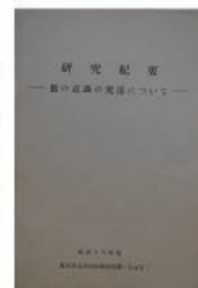
間借り園舎は、小学校の4つの教室を使用して開設されました。1室を職員室・資料室・湯沸かし室に、残りの3教室を、4歳と5歳の保育室、合同の遊戯室にあてていました。

しかし、このような限られた条件の中でも、保育活動、そして、教育実習生の受け入れと研究活動がしっかりと続けられていました。

右は、附属小金井中学校、附属小金井小学校の数学・算数関係の先生方と「幼児の数概念の発達の実態と指導」をテーマに行われた研究保育の写真と共同研究関係の資料です。

「ピアジェの本の輪読会」に始まる年間計画表、共同研究の成果をまとめた昭和39年度『研究紀要—数の意識の発達について—』、幼小中の教員、大学教員、文部省、教育委員会関係者等とともに開催された公開研究会の案内などが残されています。

附属学校園ならではの幼小中連携による共同研究の一事例です。



【図8】

1964(昭和39)年5月、附属小金井小学校間借生活を脱却し、ついに新園舎での保育がスタートしました。旧兵舎を改装した幼稚園時代から間借り時代を経て、独立した新園舎の設立にこぎつけたのです。

初代新園舎の場所は、現在の小金井園舎がある場所ではなく、キャンパスの東南端、現在の国際交流会館のあたりにありました。



現在の国際交流会館付近にあった初代新園舎

1964(昭和39)年5月



おしゃれなデザインの幼稚園正門、手前の道路は新小金井街道

また、この年、学内規定が改正され、園舎主任ではなく園長が任命されるようになりました。

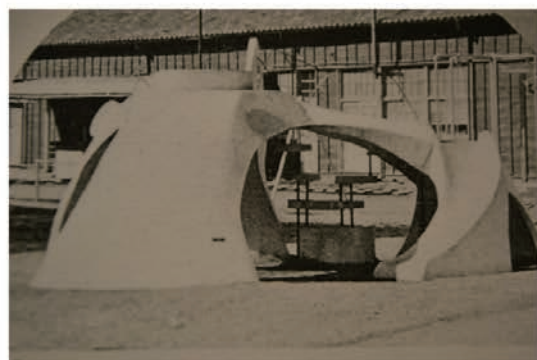
初代園長は芦田昇先生です。幼稚園科の稲毛卓先生、角尾稔先生とともに園内行事に積極的に参加され、園運営に力を尽くされました。

家族的な雰囲気の中、教職員が一体となって園運営や保育にあたるのが小金井園舎の特色です。1970(昭和45)年4月からは3年保育が認められ、小金井園舎は大きくなっていきます。

子どもが遊びのなかで学び、発達を踏まえた保育を実践し、よりよい教育計画を研究する。環境や条件が整うにつれ、新園舎では以前にも増して先生たちの教育と研究活動が活性化していきました。

新園舎には新しい遊具も設置されましたが、子どもたちに大人気だったのがプレイスカルプチャー(Play Sculpture)です。

子供どもたちが遊ぶための彫刻で、「遊具彫刻」ともいわれます。彫刻をはじめマルチな才能を発揮した芸術家、イサム・ノグチの作品が各地に残されています。

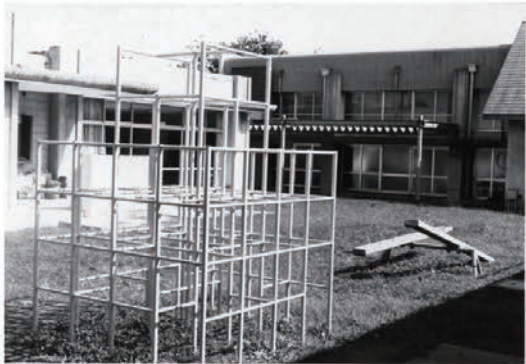


子どもたちに大人気だったプレイスカルプチャー

1972(昭和47)年4月、5学級からなる3年保育体制が完成し、2代目新園舎時代が始まりました。小金井キャンパス東門近くに新築されたコンクリート造りの近代的な新園舎が、現在の小金井園舎です。建設後、部分的な改修工事が何度か行われていますが、現在もこの建物と場所を使って、遊びを通した学びを深める特色ある保育が行われています。



管理棟 職員室や資料室、会議室や保健室 台所があります



左の写真は、4歳児学年の子どもたちが遊ぶ中庭です。小金井園舎は3歳児、4歳児、5歳児と学年ごとに庭が設置されていますが、これは当時の保育の考え方によるものだと言われています。園舎には、学年ごとの中庭と「けやきの庭」と呼ばれるけやきの大木がある広めの庭があり、晴れの日には、子どもたちの歓声がこだましています。

右の写真は、5歳児学年の中庭で、奥にあるのが1975(昭和50)年度に完成した動物の飼育舎です。飼育舎は小金井園舎の先生たちがその設置を願っていたもので、この時期から、5歳児クラスの飼育当番活動が始まりました。手前は、各学年の保育室を結ぶ役割も果たす「中央テラス」で、いつも、子どもたちの歓声が響いています。



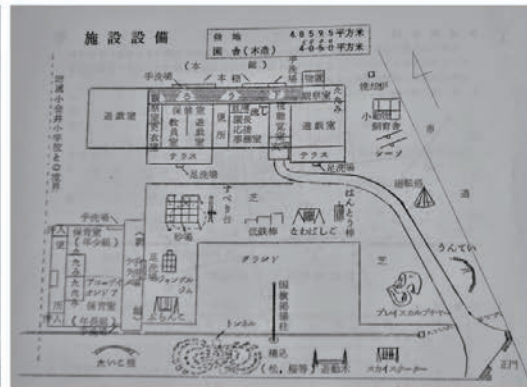
左の写真は、1973(昭和48)年度の研究紀要『幼児の発達をどうみるか その1 順番と交代』の表紙です。小金井園舎では保育研究活動が盛んに行われてきましたが、1977年(昭和52)年には、第2代園舎を舞台に、『幼児の発達をどう見るか その2』として「友だちとのかわり」をテーマに研究がまとめられました。

【図 10】

園内図の移り変わり

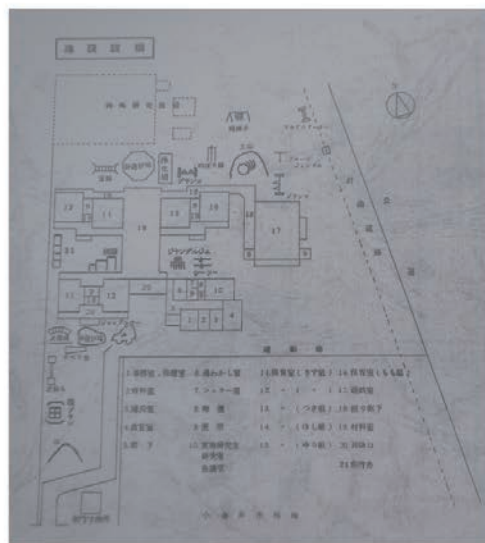


1966(昭和41)年



1968(昭和43)年

園舎が現在の国際交流会館付近にあったときの園内図です。1966年から1968年の2年間に大きな変化がいくつかありました。そのうちの代表的なものが、正門を入ってすぐの所に置かれたプレイスカルプチャーと、本館横に設置された小動物飼育舎です。そのほかにも、新館がつくられたのに伴って築山トンネルや砂場が移動していたり、保育室が移動したりと様々な変化が見られます。ぜひ、見比べてみてください。



1977(昭和52)年



2018(平成30)年

この5年前の1972(昭和47)年に現在の位置に新園舎が完成しました。新築当時は別々だった棟も、中央テラスをつくり、屋根をかけたことによって雨の日でも傘をささずにすむようになり、1975(昭和50)年には飼育舎も完成しました。

現在の園舎になってから40年以上が経ちました。建物はほぼそのままの姿を残していますが、田んぼがつくられたり、新たな遊具が設置されたりしています。

【図 11】

4. 「目をそらさないで」－小金井園舎における統合保育

展示会開催にあたり実施した聞き取り調査で、小金井園舎の歴史を語るうえで落とすことのできない貴重なテーマを教えてくださいましたのが、元教諭の平山許江先生である。

現在、附属幼稚園には4つのミッションがある。質の高い幼児期の教育、教員養成、教育研究と研修、地域・社会貢献の4つであるが、他の公私立幼稚園と違いが目立つのが研究機能であろう。【図8】や【図10】【図12】のパネルに記したように、幼児の数概念の発達の実態と指導や幼児の発達を「順番や交替」「友だちとのかかわり」を通してどう見ていくか等、当時としては先進的なテーマで研究活動が行われ、現在まで、さまざまなテーマを掲げながら継続されている。

しかし、なかでも小金井園舎の教育と研究を大きく特色づけていたのが、平山先生も中心となって取り組まれていた統合保育である。さまざまな議論を経て1978年から開始された統合保育実践の成果は『目をそらさないで』（学習研究社、1984年）として上梓され、障がいを持った子どもたちを担当がどのように指導し、かかわっていったかを詳細に述べた研究書として全国の幼稚園関係者に大きな影響を与えたことで知られている。

平山先生が書かれている次の文章は、当時の小金井園舎における統合教育の実態と成果がよく表現されており、感動を覚える内容であることからパネル化して展示した。このエピソードに心動かされた見学者も少なくなかった。「三つ子の魂」と題された文章である。⁽⁶⁾

最初のIちゃんに続く10年間、3歳児担任として自閉症、難聴、脳性麻痺など様々な子どものインテーク保育を続ける。手探りの実践である。満足感や手ごたえもあったがそれ以上に迷いや悩みの方が多かった。しかし、子どもが卒業して何年も経ってから喜びを得ることができた。教師冥利とはこういうことである。（中略）

近隣の中学校から電話がかかってきた。中2になったDの幼稚園時代の話を知りたいので来校してほしいという。何かトラブルを起こしたのだろうか。普通学級の在籍が難しくなったので転校を説得してくれとでもいうのだろうか。今さら幼稚園教諭に何を。納まらない気持ちを無理やり押さえながら放課後の中学校に向かう。教師が集まっていた。先日こんなことがあったと話してくれた。

「数名の男子がDの筆箱を取りあげ、返して欲しかったら『返してください』と言えとDに告げる。Dは律儀に『〇〇君、筆箱を返してください』と筆箱の持ち主をフルネームで呼んで訴える。その言葉が終わらないうちに筆箱は隣の子の手に渡る。Dはまた「△△君、筆箱を」と言い始めるが途中で筆箱はまた隣に移ってしまう。そこに女子Tが通りかかり「あんたたち、そういう卑怯なまねはやめなさいよ」と一喝する。男子の集団は気まずそうにその場を離れる。それを見かけた教諭がTを呼び止め、勇気ある行動だと褒め、Dとの関係を質すと、『D君とは小学校は違うけど幼稚園のときに一緒だったから知っている。幼稚園のときの担任は卑怯なまねをすると猛烈にイカル先生だったから、ああいう卑怯な行為を見ると自分も無性に腹が立つ。勇気があるというのは違って許せないのだ』と話した。そして、『先生たちも一発ガーンとかませばいいんだよ』と言って立ち去ったという。報告を聞いて幼稚園時代のTがよみがえってきた。「うわあ、幼稚園時代のまんまだ。ちっとも変わっていない。今でも姉御なんだ」。先生方に見つからないよう下を向いて、思わずニヤリとしてしまう。

中学校の教師たちは、小学校も違えば性も違うなかでTのとった行動が信じられない。しかもその行動規範が幼稚園時代に身に付けたものとはさらに驚きだったのである。私は答える。「幼児教育って極めて簡単なんです。幼ければ幼いほど言葉は役に立ちません。許せない行為は怒るだけです。Tちゃんに言わせると怒るではなく『いかる』でしょうかね。幼ければ幼いほど子どもはその人の本音を感じ取りますから。」

(中略)

Iが園を卒業してから19年が経っていた。卒業後はイベントの折に2度ほど会っただけで交流は専ら保護者との年賀状だけになる。彼は練馬区の作業所に通っているという。私が園を退職し保育者養成校の教員になったある年、Iと同じ法人の保育所に学生が実習でお世話になった。そこで、ついでといっはなんだが、実習訪問に行った折にIの様子を遠くから見せてもらおうと考えた。

実習のお礼を済ませ、私は所長さんに頼んでみる。所長さんは気軽に、作業所のメンバーは散歩に出かけているがもうすぐ戻るから門の前で待つように勧めてくれた。7～8名の一団が帰って来た。

Iはどこ？どの人？と視線を走らせていると所長さんが「I君。お客さんだよ」と大きな声で呼びかける。Iが前に進み出てくる。

「あ、平山先生だ」。

「あら、覚えていてくれたのね。大きくなったわね」

「先生も大きくなりましたね」

「I君はいくつになったの？」

「27歳になりました。先生はいくつになりましたか？」

「53歳になりました」

丁寧なことばで応えてくれるものの、会話はなかなか進まない。次の予定もあるだろうから引き留めてもいけないと切り上げることにした。

「I君、さようなら」

途端にIの手が伸び私の両手を握る。

「さよなら、あんころもち」

園を帰る際にしていた手遊びのことだ。私は27歳の青年としっかり手をつなぎ、「さよならあんころもち、またきなこ」をする。歌い終わるとIは私を振り返ることもなく、さっさと帰っていく。所長さんがひとこと「いい時代を送っていたのですね」。

私はいい時間をもらった。

「数の意識の発達」と園内研究

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
数	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	園や生活に数や量を用いた場面を多く見られるようになった。	
量の理解													
数の理解													
数の表現													
数の計算													
数の分類													
数の比較													
数の応用													
数の発展													



3年間の保育記録 ①よりどころを求めて
2004(平成26)年



今日から明日へつながる保育

数・量・形の指導のねらい 関東地区附属学校連盟・幼稚園会資料

1966(昭和41)年10月23日
西澤幸子元副園長アーカイブズ

大学の附属学校園である幼稚園は、研究活動に大きな特徴があります。園舎がまだ小学校に間借りをしていた1964(昭和39)年にも、研究活動は活発に行われていました。

スイスの心理学者ピアジェの思想を背景にした「数の意識の発達」に関する研究など独自性の強いテーマがとりあげられ、附属小金井小学校・中学校の先生方と一緒にピアジェの著作の輪読会が行われています。「幼児における数の意識の発達」をテーマとする、当時としては先進的な研究が行われました。

2004年には文部科学省特別選定となっている、一人の子どもの入園から卒園までを映像で記録した「3年間の保育記録」が制作され、全国的な注目を集め、高い評価を受けました。

【図 12】

5. むすびに代えて―課題と展望

以上、「附属幼稚園の展示とアーカイブズ」と題した小論では、2019 年度展示会「遊びのなかの学び―附属幼稚園の歩みと保育の継承」について、展示会場やパンフレットでは十分に伝えきることができなかった展示会開催の背景や経緯、問題意識、特に伝えなかったいくつかのポイントを改めて詳述した。展示パネルは一部に修正を加え資料として掲載したが、最後に本展示会を通して見出された課題と今後の展望について述べておくことにしたい。

先にも述べたように、2023 年の東京学芸大学創基 150 周年に向けて大学史資料室がなすべき課題も増えていくと思われるが、その焦点の一つが全国有数の数を誇る本学の附属学校園に所蔵されている資料、あるいは元教員をはじめとする附属関係者が個人で保管している可能性のある資料の確認と調査である。高齢化を考えると喫緊の課題であることは間違いなく、大学史資料室として組織的に取り組んでもよい作業ではないと思われる。

今回の展示会を通して東京学芸大学附属幼稚園史資料を「幼稚園アーカイブズ」として学校アーカイブズの一つとして位置づけたが、それは文書資料だけにはとどまらない。本展示会の開催に際して重要な示唆を与えてくださった小金井園舎草創期の副園長・西澤幸子先生や導入期の統合保育を担当されていた平山許子先生からのオーラルヒストリーも重要な歴史資料として再認識する必要がある。

繰り返しになるが、日常的な教育資料・保育資料は、学校や幼稚園が記録として組織的に残していくということよりも個人が思い出や記念に大切に保管していくケースが多いのではないと思われる。事実、保育指導案や保育日誌などの教育資料や保育場면을撮影した写真や映像記録、あるいは、退職後に個人で持ち帰られた教材研究関係の資料は、今回、西澤先生が寄贈してくださった資料群のように個人所蔵の形になるケースもある。それらの資料は専門性が高く、資料に書き込まれたメモ書きも含めて幼稚園教諭経験や保育経験がないと読み解けないものも多い。その点でも関係者からの聞き取り作業は喫緊の課題である。幼稚園関係者からのオーラルヒストリーの重要性は言うまでもないが、現時点では、そのデータを増やしていくことも重要な作業課題である。

冒頭でも述べたように、小論の副題を「東京学芸大学附属幼稚園史研究序説」としたのは、東京学芸大学附属幼稚園を構成する竹早園舎・小金井園舎の歩み、そしてその歴史的・教育的な意義を明らかにするトータルな附属幼稚園史の必要性を痛感したからである。その点では、今回の展示会でも十分に取り上げることのできなかった PTA 活動や後援会関係の活動記録、地域連携活動に関する記録資料、そして保護者や卒園児からのオーラルヒストリーを調査対象にすることも重要である。

保育園やこども園がその数を増やしている一方で、幼稚園はその数が減りつつある。そのような現状において、国立大学附属幼稚園はそのあり方がこれまで以上に問われていくことになるであろう。附属幼稚園ならではの質の高い保育とは何か、遊びを中心とする幼児教育の強みとは何か。これまでの歩みを振り返りながら今後の展望を開いていくための基盤になるのが附属幼稚園史研究であり、それを支える「幼稚園アーカイブズ」である。ラフな内容に終始した小論ではあるが、研究のゼロキロポストなることを願ってやまない。

注

- (1) 本展示会準備段階で参照した通史としては、倉橋惣三・新庄よし子『日本幼稚園史』、東洋圖書、1934 年、文部省『幼稚園教育九十年史』、ひかりのくに昭和出版、1969 年。文部省『幼稚園教育百年史』、ひかりのくに、1978 年。『東京都

- 教育史』通史編第1巻～第4巻。東京都立教育研究所、1994年。東京女子師範学校附属幼稚園については、お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園『年表幼稚園百年史』、1976年など。
- (2) 本展示会準備段階で参照した展示会としては、土浦市立博物館『特別展 幼稚園誕生 ―土浦幼稚園と明治期の教育玩具―』、1998年。土浦市立博物館第31回特別展図録『幼児教育コトハジメ～マチの学び舎、土浦幼稚園』、2010年。近年では、大正期に開設された公立保育園を取り上げた展示会で、すみだ郷土文化資料館が子どもの権利条約採択30周年を記念して開催した企画展『保育のまち すみだ―子育てを支えて1世紀』、2019年などがある。
- (3) 東京学芸大学大学史資料室2019年度展示会「學藝アルバム 遊びのなかの学び―附属幼稚園の歩みと保育の継承」は、2019年11月25日から12月9日まで附属図書館1階「グローバルコモンズ」を会場に開催された。図書館の限られたスペースで、さまざまな物理的制約がある中で開催された本展示会における展示表現などには多くの課題がある。
- (4) 『国立大学法人東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎 創立60周年記念誌』、7頁、2017年。
- (5) 東京学芸大学教育学部附属幼稚園『小金井園舎 20年のあゆみ』、9頁、1977年。なお、小金井園舎草創期における教員をはじめとする関係者の努力と苦労については、東京学芸大学附属幼稚園PTA機関誌である『つくし』No.75創立20周年記念号（1977年）に収録されている「座談会 思い出を語る」に西澤先生、益田先生をはじめとする幼稚園教諭と保護者との対話が興味深い事実を明らかにしてくれている。
- (6) 平山許江『東京学芸大学附属幼稚園の保育実践 保育楽を学びました』、2019年。

2019 年度大学史資料室展示会「遊びのなかの学び」 —アンケート分析を中心に—

木暮絵理（大学史資料室専門研究員）

1. はじめに —展示会の概要—

2019 年 11 月 25 日から 12 月 9 日にかけて、「學藝アルバム 遊びのなかの学び—附属幼稚園の歩みと保育の継承—」と題して東京学芸大学大学史資料室展示会（以下、展示会と記述する）が開催された。会場は、附属図書館 1 階のグローバルコモンズの一部をお借りした。

本展示会においては、東京学芸大学附属幼稚園のあゆみを取りあげ、遊びを通して学ぶという附属幼稚園の教育のありかたを見つめることによって、日本の幼児教育と保育の意義を確認した。

本展示会では、当資料室が所蔵している資料の他、附属幼稚園竹早園舎の所蔵資料（写真、保育記録等）、附属幼稚園小金井園舎の保護者が作成したアルバム、附属幼稚園小金井園舎の元教諭で副園長も務められた西澤幸子先生が所蔵していた指導案や研究資料、当時配布したプリント等の貴重な資料¹を展示させていただいた。

2. アンケート分析

展覧会や展示会においてアンケートを置くというのはかなり一般的に広く行われている。アンケートは来場者からのフィードバックを得られる貴重なツールであり、展覧会・展示会の意図や内容がきちんと伝わったかをはかることもできる。また会期が長い場合には、そのアンケートの意見に応じて対応をとる事も可能になり、展示の改善にもつながる場合がある。

東京学芸大学大学史資料室（以下、資料室と記述する）も例年展示会に際してアンケート調査を実施している。その回答に関して、回答者の所属や年齢等に関する集計は行われていたものの、そこに記述された内容については今まで分析されてこなかった。そのため、残念ながらそのデータが次年度の展示会にもあまり活かされることは、難しかったと考えられる。本稿ではアンケート分析をすることによって今回の展示会の反省をすることと、その結果を次年度以降の展示会に活かしていきたいと考える。

展示会においては看視の人間等が常駐して、来場者数をカウントしてはいないため、残念ながら正確な来場者数は不明である。参考になる数としては芳名帳の記帳数である 172 があげられるが、授業の一環として団体で来場した学生が記帳していなかったり、芳名帳に気づかなかったとメールで連絡をくれる方がいたりしているため、少なくともそれよりも 50 人程度は多いと推測される。そのため芳名帳を置く位置や、来場者のカウント方法について再検討する必要があるだろう。

また、展示会のパネルのデータをまとめた冊子を持ち帰り用の資料として設置したが、その数字も来場者数の参考になるだろう。一人の人が複数冊持って行っている場合や、もちろん持っていない人もいるため正確な数字とは言えないが、冊子は 207 冊はけており、もっとも多い数字となっている。双方の数字を勘案するに、2 週間におおよそ 200 名程度の来場者があったと推察する。

今回の展示会のアンケートでは、例年のアンケートとは項目を若干変更し、「おもしろかったか」を聞く項目

をなくしている。また、「興味関心をもったもの」については選択肢を廃し、自由記述とした。来場者の所属については、展示会のテーマである幼稚園やそれに関連した施設等の関係者を把握しやすくするために、それに關する項目を増やしている。さらに、学外の一般市民にのみ回答枠のあった「居住地域」をすべての回答者が応えられるように別に項目を設けた。

まずは今回の展示会にかかるアンケートの回答者について概観しよう。アンケートの回収数は 84 件。その所属等は以下のようになっている。

学生が多く、その中でも授業の一環としてきている人が多い。今後、大学の授業においていかに活用してもらうかについて、検討する余地があるだろう。また、本学幼稚園科等の卒業生や、幼稚園の元教職員がかなり遠方からも来場していることも注目値する。その方々の多くは知人や幼稚園関係者から展示会についての情報を得たと回答している。今後の展示会における広報活動について、誰を対象にどのように行うのか再考の必要があるだろう。

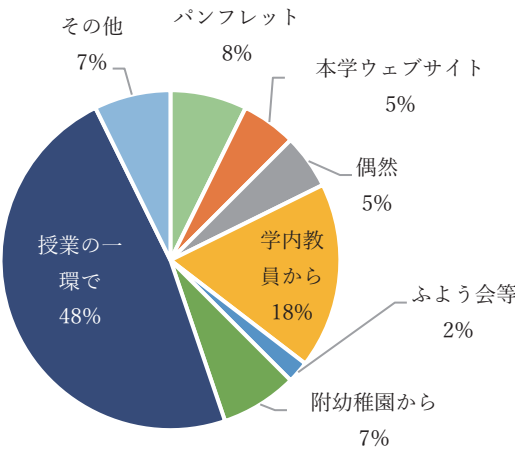


表 1 この展示会を何で知ったか

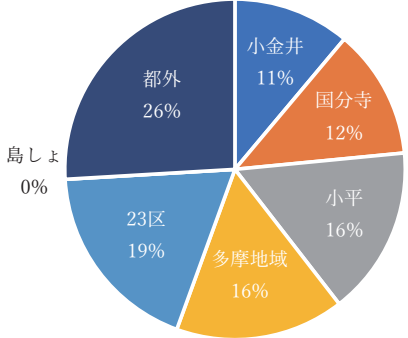


表 2 居住地域

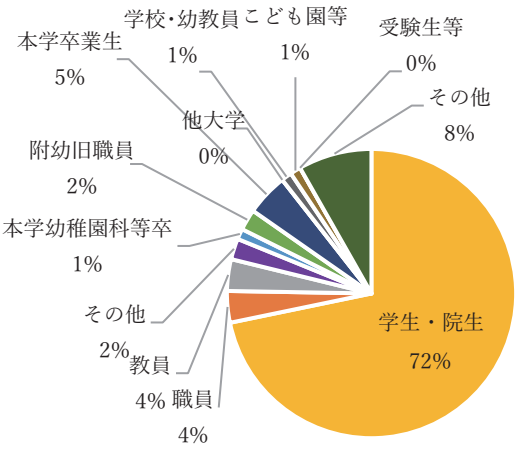


表 3 所属

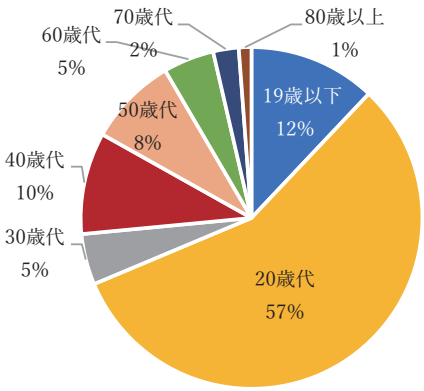


表 4 年代

自由記述において、その内容を概観すると、展示の構成等に関するもの・展示の内容に関するもの・その他（回答者自身の経験談等）に分けることができる。以下、その3点について若干の分析を加えていきたい。

2-1. 展示の構成に関して

展示の構成について言及している記述は、84件のうち20件確認できた。その多くが授業の一環か、学内の教員から聞いたことによって展示を訪れた、本学の学生・大学院生等である。また、具体的な授業名が上がっている回答から、博物館実習Ⅰ・Ⅱあるいは博物館資料保存論を受講している学生であることも確認できた。

彼らの多くはキャプションの文字の多さに言及している。今回の展示会では以前の展示会とはパネルの構成を変え、A2判またはA1判のパネルを使用したことによって1枚のパネルの文字数も増えている（参考図1、図2）。さらに、ある程度文字で伝えなければならない／伝えたい内容が多かったため、文字数が多くなってしまったことは否めない。人が集中して読める文字量を踏まえてパネルを作成する必要がある。

また、「導線はわかりやすかったが、スペースが狭かった」という主旨の意見も複数寄せられている。前述のように、既存の展示スペースではなく図書館のスペースの一部分をお借りし、元の機能を保持させたまま展示会場としているため、スペースにかなりの限りがあった。展示する実物等を含めた資料数もかなり削ったものの多かったため、車椅子が通れる程度の通路幅は確保したものの、かなり狭小な印象になってしまった。また、授業の一環で学生が訪れる場合には15名程度かそれ以上の集団で来場するため、さらにスペースが狭く感じられてしまったのだろう。

会場という点については、他にも複数の意見が寄せられており、特に会場となった図書館という場については賛否両論ある。「これまでと違っていてよかった」という意見の一方で、学外から来場した人からは「図書館内



図1 2018年度展示会の様子

⇒



図2 本年（2019年度）の展示会の様子

だと利用者証がないと入ることが出来ない」という意見も寄せられている。附属図書館には、セキュリティと図書の保護等の目的でいわゆるゲートが設置されている。学内の学生及び教職員は利用証があるため自由に入ることが出来るが、外部から訪れた場合には毎回カウンターで入館手続きをする必要がある。特に今回の展示会の場合、附属学校園である幼稚園をテーマに展示を行ったためその関係者が多く訪れた。しかしその多くが現在本学の学生・教職員ではないため手続きを取る必要があり、ゲートの存在が障害になってしまっていた可能性は否めない。「気軽に見ることでできる場所であれば、さらに多くの方々と感想を共有できるのではないか」という意見もあり、展示会場に関しては今後、テーマや来場が見込まれる人を踏まえたうえでの検討が必要になるだろう。また、次年度以降も図書館のスペースがお借りできるとも限らず、欲をいえば資料室として恒常的な展示空間があればと願っている。

2-2. 展示の内容に関して

展示の内容について言及している記述は、84 件のうち 36 件確認できた。特に幼稚園の歴史やそれに関する写真についての言及が多くみられた。写真については特に入ってすぐの壁面に展示した、昔と今の園児の様子の写真のコラージュはかなり評価が高かった。一方、「遊びの中で学びを体現している写真などがあるとより面白い」のではないかという意見も複数あり、あらためて写真から読み取ってもらうことの難しさも実感している。今回の展示会では写真をできるだけ多く使用し、昔の幼稚園の様子や「遊びのなかの学び」をいかに実践しているのかということを伝えるということを目指しており、ある程度達成できたと認識しているが、写真をいかに展示するかということは常に課題とし続けなければならない。

歴史に関しては、「自らが学んでいる大学の歴史について知る機会になった」という主旨の意見が学生から複数寄せられるとともに、現在附属幼稚園に通っている子どもの保護者からも「せっかく幼稚園に来ているので、教育方法や幼稚園の来歴など知りたい」という意見が寄せられている。資料室の課題の一つとして、自校史をいかに知ってもらうかということがあげられている。アンケートの回答から、学生のみならず附属学校園の保護者からもニーズがある程度あることが確認できたため、今後展示を含めて自校史の認知を高める活動をしていく必要があるだろう。

また、本学幼稚園科の学生が幼児教育史という授業の一環で来場しており、その学生たちは昔の指導案にも注目している人が多かった。現在幼稚園教育について学んでいる真っ只中の学生たちには指導案の作成が身近な問題であるためと考えられる。

今回のアンケートでは自由記述欄の他に「特に興味・関心を持ったもの」という項目を設けた。その回答で最も多かったのが写真、次いで指導案であったが、3 番目に多かった回答は「統合保育」であった。附属幼稚園小金井園舎では開園のごく初期から統合保育を行っており、本展示会では元教員の統合保育に関する手記を内容も含め展示した。その内容について、学生・卒業生・教職員・保育士等様々な所属の人たちから関心が集まっており、教育についてこのように展示を行うことの重要性が示唆されている。

2-3. その他

その他、幼稚園に関する経験談や資料室そのものへの意見等を述べているものは 16 件確認できた。その中で最も多かったのは、「資料に触れられる機会を増やしてもらいたい」「資料の整理に学生が関わりたい」という意見だった。それらの意見は博物館学を学ぶ学生を中心に出ている意見であり、資料の整理に関わることによって「みんなで愛着をもって資料の保存ができれば素敵だなと思いました」という記述も見られた。資料室は資料を

保存する場であり、学生を入れることは難しい部分もあるが、将来的には学生の実践の場としてのニーズ等にも応えていけるようになればと思う。

また、展示を通して昔の附属幼稚園の様子や自らが通っていた幼稚園の様子を思い出したという記述も見られた。本展示会に先立って、事前調査として前出の西澤幸子先生を含めた附属幼稚園小金井園舎の元教諭から聞き取り調査を行ったが、日本の幼稚園史は体系的な研究がまだ多くなく、引き続きの調査・研究が必要である。元教諭や幼稚園関係者に限らず、幼稚園に関する聞き取り調査を行い、オーラルヒストリーを蓄積させていくことは幼稚園史研究の上でも有意義ではないかと考えられる。

3. おわりに

今回の展示会において、メインターゲットの一つは本学所属の学生及び教職員であったが、アンケートの集計を確認すると8割が学生・教職員という結果になった。本学には12の附属学校園が存在するが、特に学生は自らが教育実習に行く際ぐらしか関わりがないのが現状である。また、初等教育・中等教育を専攻する学生にとっては、幼稚園はほぼ関わることはない。そのため、どのような教育が行われ、どのような歴史を持っているのかについては、残念ながら知る人はほとんどいない。ある学生は、「自分の母校となる学校の歴史について、知りたくても知る機会がなかったのでいい機会になった」と記述していた。本学では自校史教育というものがあり行われておらず、ましてや附属学校園については知る機会が非常に限られている。

東京学芸大学は、様々な師範学校が統合して設立した大学である。そのため、附属学校園の歴史は各師範学校の歴史の中にも位置づけられ、その様相は多岐にわたっている。また、それはそのまま東京の教育史にも深く関わっているのである。東京学芸大学の大学史資料室である以上、その使命として夫々の附属学校園の歴史や教育理念を丁寧に紐解き、それを学内外に紹介していく必要があるだろう。

アンケートの分析から、展示会及び大学史資料室のあり方の様々な課題が見えてきている。今後に生かすとともに、情報の収集と発信を担う東京学芸大学のアーカイブズとしての役割を果たしていきたい。

注

- 1 詳細は本誌所収の君塚論文「附属幼稚園の展示とアーカイブズ—東京学芸大学附属幼稚園史研究序説」(pp.11-28)を参照していただきたい。

[参考]

東京学芸大学大学史資料室展示会(第7回) アンケート

該当する番号を○で囲むとともに、ご意見等をお書きください。今後の展示会の参考にさせていただきます。
なおこのアンケートは、それ以外の目的には使用いたしません。

1. この展示会を何で知りましたか? (複数回答可)

- | | | |
|------------------------|---------------------|-----------------|
| 1. ポスター | 2. 東京学芸大学ウェブサイト | 3. 偶然、東京学芸大学に来て |
| 4. 学内の教員から聞いて | 5. ふいよう会・たんぽぽ会からの連絡 | 6. 附属幼稚園からの連絡 |
| 7. 授業の一環で (授業名: _____) | |) |
| 8. その他 (_____) | |) |

2. 今回の企画展の中で特に興味・関心を持たれたものは何ですか? 自由にお書きください。

3. 今回の企画展についてのご意見、また内容や資料・写真等について教えていただけることなどがありましたら、自由にお書きください。

4. あなたのご所属(園名・学校名・学部・学科・専攻名等差し支えない範囲でお答えください。)

- | | | |
|-------------|--|---------------------------------|
| 学内の方 | 1. 学生・大学院生等 (所属 _____ 年) | 2. 職員 (_____) |
| | 3. 教員 (_____) | 4. その他 (_____) |
| 学外の方 | 1. 本学幼稚園科・幼児教育選修・修士課程卒業生等 (_____ 年度 卒・修了) | |
| | 2. 附属幼稚園旧教職員 | 3. 本学卒業生 (_____ 年度卒 専攻 _____) |
| | 4. 他大学学生・大学院生等 (_____) | |
| | 5. 学校・幼稚園教員 (_____) | |
| | 6. 子ども園・保育所教員・保育士等 (_____) | |
| | 7. 受験生・中高生、その関係者 (_____) | |
| | 8. その他 (_____) | |

5. どこからおいでくださいましたか?

小金井市	国分寺市	小平市	多摩地域 (_____)	市・町・村
23 区 (_____)	区	島しょ部 (_____)	都外 (_____)	府・県

5. あなたのご年齢を、差し支えなければお教えてください

- | | | | | | |
|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|
| 1. 19 歳以下 | 2. 20 歳代 | 3. 30 歳代 | 4. 40 歳代 | 5. 50 歳代 | 6. 60 歳代 |
| 7. 70 歳代 | 8. 80 歳以上 | | | | |

ご協力ありがとうございました

鈴木禹志さん聞き取り調査報告

木暮絵理（大学史資料室専門研究員）

2020年1月14日13時～16時

出席者（敬称略）

鈴木禹志氏

藤井健志、君塚仁彦、金子真理子、椿真智子、木暮絵理

はじめに—鈴木禹志さんについて—

鈴木禹志（すずき・ひろし）さんは昭和30（1955）年から昭和34（1959）年にかけて、東京学芸大学の甲類社会科に在籍されていた。おりしも東京学芸大学は、木下一雄学長のもとで昭和24（1939）年の東京学芸大学創立以降、昭和39（1964）年にかけて世田谷、竹早、小金井、追分、大泉の計5つあった分校を小金井に統合する計画が進められていた。鈴木さんはまさにこの分校時代から小金井統合時代への過渡期に東京学芸大学に在籍していらしかったことになる。鈴木さんの入学時にはすでに竹早、追分、大泉分校は小金井分校に統合されていた¹。そのため社会科だった鈴木さんは昭和30年と31年は小金井分校に、32年と33年には世田谷分校に在籍されることとなった。在学中には1年生から新聞会に所属し、卒業するまでの4年間活動されていた。卒業してからは学習研究社（学研）に入社し、学習雑誌の編集者としてお勤めになった。退職後には大学のスポーツを個人で取材し、「学大スポーツ新聞」をお一人で15年にわたり発刊し続けられた。

以下は、聞き取り調査の際に得られたお話を小テーマごとにまとめたものである。なお、「」は聞き取り調査時の音声の書き起こし、「」内の（）は筆者による補足となっている。

「若草もゆる」について

鈴木さんが最初に取り上げたテーマは「若草もゆる」であった。「若草もゆる」は東京学芸大学の学生歌である。東京学芸大学には校歌というものがいないため、この歌は入学式はもちろん、大学スポーツにおける応援やイベントのたびごとに歌われている。また、学生歌制定の動きは資料としてほとんど残されておらず、昭和45（1970）年発刊の『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』にも記述は全く見られない。平成11（1999）年発行の『東京学芸大学五十年史—通史編—』でもまたしかりである。それ故、かなり貴重な証言であることは間違いないだろう。

この歌が東京学芸大学の学生歌として発表されたのは昭和33（1958）年5月31日の開学式典の際であったという。

「58年5月31日ですね。世田谷分校の講堂で行われた開学式典で、学生歌「若草もゆる」の発表がされたということで。これについてちょっと最初お話ししたいんです。（中略）開学祭のときに村上学長が記念講演

をして。開学祭は4日ぐらいに開かれたんですけど、5月31日という創立記念日の講堂で行われた記念式典の村上学長の挨拶の後、入選歌という。だから、非常に大事な場面でそれが発表になったということですね。」

学生歌は作詞作曲ともに学生による公募で選ばれた。歌詞の募集が行われているのを鈴木さんが知ったのは、昭和32（1957）年のことであったが、それ以前から学生歌をつくろうという話については知っていっちゃったという。

「それで、この「若草もゆる」の募集というか学生歌をつくろうと言ったのは、僕は大学1年のときクラス委員をやっていたものですから、クラス委員でいろんな大学の自治会か何かだったんじゃないかと思うんですけど、そのときもう既に話が出ていました。学生歌をつくろうというですね。」

学生歌の話を初めて聞いたのは昭和30（1955）年7月、クラス委員として「学生歌制定委員会」に出たときだったという。だが、その後の動きに関してはよくわからないままだった。その後、鈴木さんは昭和32年に世田谷分校から用があって小金井分校に出かけたときに、偶然掲示板に「学生歌募集」の貼紙が貼ってあるのを見たのである。

「僕、3年生だったんですけど、そのとき募集が出たんですよ。普段あまり休講なんかでも大して関心なさそうで知らん顔しているのが、ちょっと（掲示板に）人ばかりしていたんです。僕も何かと思ったら、今度、学生歌を募集すると。それで何がそのときの学生にとって一番大事なことから言うと、賞金が出たんですよ。それで「よし、僕も」と実はそのとき思いました。だけど結局は出しませんでしたけどね。だけどそういう気持ちがあったので、これは誰が、どんなやつが当選したのかというのに興味があったんです。」

この時の賞金は3000円。大学の年間授業料が6000円、大泉寮の年間寮費は1200円だった時代である。苦学生にとってはのどから手が出るほど欲しい金額だ。

「僕、非常に興味があったのは、作詞した人が4年生の山田さんという方は美術科の方です。その後、作曲のほうの募集もあって、作曲のほうで当選されたのは佐久間さんという方で、これは数学科なんですね。ちょっとと思うと、作詞したのは国語科かなんかじゃないかなと思ったんですけど、美術科の4年生の山田さん。作曲したのは数学科。作曲したんだから、音楽科がいるんだから音楽科じゃないか。ただ、編曲ってありますよね。（中略）しかしこの佐久間さんの曲はほとんど手を入れるところがない、よくできているということだったらしいです。」

どれほどの応募があったのかはわからないが、このとき入選したのが美術科4年生の山田南海司（なみじ）さんが書いた「若草もゆる」であった。平成19（2007）年発行の『辟雍』第4号で「若草もゆる」について遠藤満雄^Ⅱによるインタビュー記事が掲載されている。山田さんは和歌山県出身。学費、生活費も自分で賄うという約束で東京に出てきていたため、大泉寮に入り、アルバイトに明け暮れていた。また、美術の中でも工芸を専攻したため材料費もばかにならなかったという。

山田さんは、当初卒業後は東京で美術教員として就職しようと考えていたが、卒業年の昭和33（1958）年春

には東京都の美術教員の募集がなかった。そのため1年待ち、昭和34（1959）年の就職を目指したがその年も東京都に美術教員の募集がなく、出身であった串本の母校の中学校の校長先生に声をかけてもらい、和歌山県串本で中学校の教員となったという。

ところが、『辟雍』における山田さんのインタビューでは、山田さんは「若草もゆる」の入選発表会や「学生歌制定記念式典」のようなものが催されたような記憶がないと語っている。推測するに、鈴木さんが参加し、学生歌の入選を知った開学祭は世田谷分校主体のものであり、当時小金井分校に在籍していた美術科の山田さんには情報が届かなかったのではないだろうか。また、作詞当時山田さんは4年生であったが、5月の時点ではもう卒業したとみなされて連絡もされなかった可能性も考えられる。

さて、作曲で当選したのは当時数学科の2年生だった佐久間威さんである。佐久間さんは草原コールという混声合唱のサークルに所属してはいたが、作曲を本格的に学んだことはなく、楽器の演奏もできなかった。鈴木さんが好きだという佐久間さんと草原コールのエピソードがある。佐久間さんが草原コールに入るきっかけとなった話だ。佐久間さんが、前述のインタビュー内でも語っている。

入学して間もなくのころでした。バスを降りて校門（たぶんプール門）を入ったあたりで、突然のにか雨に遭遇したんです。教室はキャンパスの西のはずれの方ですから（数学科など理系の拠点である自然館はまだなかった）、そこまでは行き着けない。仕方なくそばにあったサークル長屋（戦前の兵舎をそのまま利用した木造平屋建ての建物）の軒先を借りて雨宿りをしたんです。そこがたまたま「草原コール」という混声合唱団の部室でした（「草原コール」は最近まで存在した）。もともと歌を歌うことは嫌いではなかったのです。それが縁でそのサークルに入ることにしたのですⁱⁱⁱ

草原コールは当時盛んになりつつあった「歌声運動」のブームもあり、活発に活動していた。鈴木さんも草原コールの昼休みの集まりには時々参加していたという。

「当時何だか知らないけど、歌声運動というのがやけにあったときで、学生の何かのときには必ず歌から入るんですね。「原爆許すまじ」とか必ず、歌声運動というすごいのがあったわけで。」

佐久間さんもまた小金井分校の掲示板で作曲家募集の張り紙を見て、応募したという。当選の知らせがどのようにあったのかは記憶にないが、作曲の賞金は作詞と同じく3000円で、佐久間さんはそれを大学の半期分の授業料にあてた。

「若草もゆる」が生まれてからすでに半世紀以上の年月が過ぎた。鈴木さんは、当時学生歌の制定に大きな関心はあったが、現在に至るまで「若草もゆる」がこれほどまで多くの人々に歌われるようになるとは想像すらしていなかったという。東京学芸大学の学生歌として「若草もゆる」は、これからも歌い継がれていくだろう。

昭和30年代の学生生活

学生歌の作詞・作曲ともに、その募集の掲示は小金井分校のみで行われていた。

「昭和 32 年に小金井だけに掲示板を出して、世田谷分校にしなかったということなんですけど。結局、見たのは小金井でしか見たことないわけですよ。（中略）世田谷にも掲示板はあったけど、世田谷には出なかったわけですよ。」

鈴木さんはこれに関して、小金井に統合されることが決まっていたからではないかと推察していらっしゃった。先述したように東京学芸大学では昭和 24 年から昭和 39 年にかけて小金井キャンパスへの統合計画が進められており、年々世田谷分校から小金井分校へ移行する専攻科も増えていた（表 1^{iv}）。昭和 32 年の段階では体育科・美術科は 4 年生まで、数学科は 3 年生まで小金井分校に在籍しており、翌昭和 33 年になると数学科も 4 年生まで小金井分校に在籍することとなった。

当時の小金井キャンパスについての印象をお聞きすると、最初に出てくる言葉は「広い」「ぼろい」である。手描きの地図を持参いただき、拝見すると、広い草原の中にぽつぽつと兵舎を利用した建物があった様子がうかがえた（図 1）。

「このころは舗装がなくて夏は草ぼうぼう、草はでかくなるし。広いところはあるけど、勝手に僕ら遊んでいましたけど。」

「今は人工芝とかいろいろありますが、もの

表 1 年度別在籍教科一覧表

年度	3 年	4 年	備考
昭和24年度			
25 "			
26 "	国社数理音図体家職英		
27 "	国社数理音図体家職英書	国社理音図体家職英数	
28 "	国社数理音図体家職英書	国社数理音図体家職英書	
29 "	国社数理音図体家職英書	国社数理音図体家職英書	
30 "	国社数理音図体家職英書	国社数理音図体家職英書	
31 "	国社数理図体家職英書	国社数理音図体家職英書	体育は30年度に3年、進学した4年生は小金井に移籍。 体育・音楽は3年進学せず。
32 "	国社数理図体家職英書	国社数理図体家職英書	数学は3年進学せず。また32年度に3年、進学した4年生は小金井に移籍。 第1期教育心理が3年進学。
33 "	国社理家教心職英書	国社理家教心職英書	図工は3年進学せず。また32年度に3年、進学した4年生は小金井に移籍。
34 "	国社理家教心職英書	国社理家教心職英書	家庭・音楽は3年に進学せず。
35 "	国社教心職英	国社理家教心職英	理科・職業は3年に進学せず。
36 "	国社英	国社教心職英	教育心理は3年に進学せず。
37 "	国社英	国社英	
38 "	国社英	国社英	

(注) 教科名のうち、国・社・数・理・音・図・体・家は甲・乙類共通、教心は甲類、職・英・書は乙類の教科を示す。
教科名は各年度の3年および4年に在籍した教科である。
類・教科はその年度の呼称である。



図 1 昭和 30 年（1955 年）の小金井分校の風景

すごいほこり風なんです。ほこり風がすごい。」

「夏の草の生え方もすごいわけですよ。先生が向こうから入ってくるんだけど、こう草を分けて。「どこから来たんですか」って（笑）。僕らも先生が来るまで、教室の中なんか狭くて暗いし汚いし、教室になんかいられないので外で遊んでいましたけどね。」

「東門の前あたりにブタとかニワトリを飼っていたんでしょうかね。すごいにおいがするんですよ。それからこの中にいろいろな工場があったというんですけど、何かいろんな建物があったということは認識できるんですけど、一見してぼろ家の兵舎が点在していて草がぼうぼうで。今みたいに木がでかくないわけですよ。本当に並木があるぐらいのもので。道も狭いし、砂利道で舗装していないから。」

勉学環境としてはかなり劣悪な状態だったことがうかがえる。鈴木さんの言葉をお借りすれば、まさしく「文化果つところ」であった。当時は世田谷分校に大学本部が置かれていたため、願書の受付や合格発表、入学式や卒業式などはすべて世田谷分校で行われていた。昭和 11（1936）年建造のその建物は現在でも附属高等学校の校舎として使用されているが、当時から二階席のある講堂や附属図書館などもあった。

あまりにも「カルチャーのにおいがしない」ことを「ピンチ」と捉えた学生時代の鈴木さんは、とにかく文化の香りを求めて様々なところへ出歩いた。その際に起点となっていたのが三鷹駅だった。

「三鷹は 1 つの起点で、アルバイトに行ったり。（中略）喫茶店に行ったり、映画を見たりね。」

当時、三鷹の南口駅前に「第九」という音楽喫茶があった。武蔵野美術大学などの学生や、近辺に寮がある東京大学の学生などのたまり場となっていた。書房も併設され、1 階が第九書房、2 階に第九茶房が営まれ、多くの人に愛され、三鷹の文化的な発信地の一つとなった。鈴木さんにとっては、音楽好きの友や映画好きの友とのかけがえのない交流の場だったという。また日比谷の野外音楽堂、いわゆる野音で行われていたコンサートにもよく聴きに行った。

「生の演奏を（聞くために）、三鷹発という電車があって、まだあのころ三鷹発の 4 時ごろ（ボックス）座席のあるあれ（電車）が 1 本出るので、その電車に乗ってよく日比谷に行きました」

昭和 31（1956）年に関東初の公団住宅である牟礼団地が完成した。それに伴い、同年に三鷹駅南口～久我山間の京王バスが運行を開始し、三鷹駅周辺はまさに賑わいを見せ始めている時代であった。

「文化果つところ」と評されてしまった東京学芸大学小金井分校ではあるが、学生の様々な活動や、勉学活動は活発に行われていた。熱心な教員や学生たちによってゼミやサークルの研究会や勉強のための会合が開かれていたという。

また、大学のキャンパス内は「ボロ」だったが、武蔵野の自然環境はすばらしかったという。特に天気の良い日、5 月から 6 月の新緑のころや、11 月の紅葉の美しさには感動したとおっしゃっていた。かつては大学から武蔵小金井駅までの道の両側の木々も大きく、「武蔵野」を体感できた。近辺には貫井神社や野川沿いの道、国際基督教大学の牧場などの名所がたくさんあり、若き日の鈴木さんたちは気の合った友達とゆっくり散歩を楽しんだ。

大泉寮

東京学芸大学は複数の師範学校が統合されることによって設立した大学であるため、昭和 30 年代には数多くの分校や附属学校、寮が存在した。これらのかなりのものは現在でも寮や附属学校としてその姿をとどめている。そのうちの一つに、大泉寮がある。大泉寮は現在でも東京学芸大学の男子寮として使用されているが、鈴木さんの在学時も、男子寮としては「主力」であったという。先述したように「若草もゆる」を作詞した山田さんもこの大泉寮に入居していた。寮費が年間 1200 円と安く、食事が出たため、地方から出てきた苦学生は大泉寮に住むことが多かった。食費は 1 か月 1800 円、1 日 3 食 60 円だった^v。なお現在は、食事は全て自炊となっている。

大泉寮から 1km ほどの距離に東映の撮影所がある。鈴木さんが大泉寮に遊びに行っていた時代には、夕方になると撮影所からアルバイトの依頼が来たという。窓の外から「ライトマン 3 名、エキストラ 2 名」などと声がかかるのだ。

寮には時々鈴木さんのような自宅通学者も訪れて、寮生と車座になって夜遅くまで語り合った。真ん中には貴重なお金で買った焼き鳥も並んでいたが、「焼き鳥は貴重だから舐めるだけにしろ！ 噛んではいけない！」と注意されたという。地方出身の苦学生が集まる寮ならではの作法があることもうかがい知ることができる。

秋になると寮祭が盛大に開かれた。寮祭は現在も行われているが、当時は食堂で郷土の民謡歌比べや、野外ではキャンプファイヤーなども行われたという。

印象的な教員・学生

鈴木さんは新聞会で学生記者をやっていたために、学内外のさまざまなところに顔を出した。また持ち前の好奇心で、専攻していた社会科以外の講義でも、面白いと噂を聞いた授業には顔を出していたという。

鈴木さんにお話を伺っていると、印象的だった教員や学生の名前が出てくる。例えば社会学の城戸浩太郎、法学の星野安三郎、当時学生で学生自治会などで活躍し、後に国分寺市の市長にもなった山崎真秀などである。当時法学の助教授であった星野安三郎と山崎真秀について若干補足しよう。

星野安三郎は大正 10（1921）年栃木県出身の憲法学者である。旧制第二高等学校（仙台）を経て昭和 18（1943）年東北帝国大学法文学部法学科に入学しすぐに入営することになった。戦後に復員・復学をして昭和 22（1947）年に東北帝国大学を卒業。東北大学特設研究科を了し、昭和 23（1948）年に、親友の父親であった東京第三師範学校長の田中保房に誘われて同校の講師となる。その後新制東京学芸大学が創立すると、それに伴い東京学芸大学の講師、助教授、教授として研究・教育活動をつづけた（星野安三郎について）。その助教授時代に昭和 30（1955）年入学の鈴木さんが出会ったのである。鈴木さんは星野について以下のように記憶されている。

「（星野さんは）師範学校なんて行きたくないと思ったんだけど、行ったところ意外に、やや旧制高校の（自由な）雰囲気があるといって気に入られて」

鈴木さんは星野による憲法の授業には特に圧倒され、学部 1 年生の時に書いていた日記にもしばしばその記述

がみられるという。講義の外でも学生の研究会などでたびたび学生を鼓舞する発言をしていたことも記憶している。その後、星野は昭和 56（1981）年に東京学芸大学を退職し、立正大学法学部の教授となった。

山崎真秀は昭和 5（1930）年に東京生まれ、第一東京市立中学校（後の東京都立九段高等学校【閉校】）に昭和 18（1943）年に入学した。在学中に愛知県刈谷市に疎開し、愛知県の刈谷高等学校を卒業。鈴木さんの疎開していた静岡県磐田郡二俣町（現、浜松市天竜区）と地理的に近いことから、親近感を覚えたそうだ。その後静岡県の中学校教員、早稲田大学第一文学部哲学科（中退）を経て昭和 28（1953）年に東京学芸大学に入学した。鈴木さんよりも年齢では 7 つ、学年では 2 つ先輩にあたる。その山崎やその周りの人々の印象はかなり強烈に残っているという。鈴木さんは、インドネシアで開かれたバンドン学生会議に日本の学生代表として派遣された山崎を支援する資金カンパにも協力した。

「まあとにかく山崎さんというのはすごい人だなと思うんですけど、僕の感じでは、僕より 2 年上の先輩たちの山崎さんを取り囲むグループはすごい立派な方で。ほとんど大学教授とか、今でもやっている方がいるんじゃないかなと思うんですけど。もう 80 過ぎても、どこか私立大学の教授をやっている方が多いんじゃないかと思う。だから取り巻きがすごく立派だね」

山崎の周辺の人々についても優秀な人が多かったと回顧し、その理由を以下のようにおっしゃっていた。

「昭和 28 年に入学された方たちはすごい優れていたね。どうしてかという、ストレートに來た人でも昭和 28 年入学の人たちは全部国民学校なんですよ。小学校というのは、僕が小学校 5 年生のとき小学校になったんですよ。だから、僕より上の学年はいいけど、その上は何もないまま新制になって。国民学校のまま新制中学に入ったわけね。小学校というのは全く経験していなくて、国民学校としか呼ばれないわけです」

彼らは、小学校にあたる期間のすべてが戦時中の教育で成長し、中学校に入った瞬間に戦後の教育に切り替わった世代である。端的に言えば「戦争は嫌だ」という信念を一番に持ち、学問もするが学生運動にも力を入れる人たちだったと鈴木さんはおっしゃっていた。

その後山崎は憲法学者・法学者として東京学芸大学助手、広島大学講師、北海道大学助教授、東京学芸大学教授を経て、平成 6（1994）年まで静岡大学人文学部教授を務めた。

鈴木さんは当時の東京学芸大学の様子について、以下のように振り返られた。

「ぼろっちいところなんだけど、一生懸命ゼミとか話し合いをやる雰囲気があったということだけは証言しておきたい」

「学大スポーツ」

「学大スポーツ」というのは、鈴木さんが全てお一人で取材、編集、発行していらっしゃる東京学芸大学のスポーツ新聞である。年間 10 号程度が発行され、多いときには 14 号発行された年もある。学生時代に新聞会に所属し、新聞発行の経験があるとはいえ、それを全てお一人で作っているというのだから頭が下がる。なお、創

刊号は2005年11月24日発行で、テーマは「学芸大にとっての箱根駅伝」であった。

学芸大と箱根駅伝というテーマこそが、鈴木さんが「学大スポーツ」をつくろうと思ったきっかけであった。学生時代には毎年応援に行き、毎回学芸大の選手の力走に心を揺さぶられていた。特に昭和33年の第34回大会の時にはゴールに先回りをして待っており、その時の出来事を今でも鮮明に覚えているという。

「34回大会（1958年）のとき、朝から雨が降っていたんですね。箱根の（山の）中に入って下のほうで苦しんでいたのを僕、見たんですけど。ゴールに先回りして、昔のまだテレビ中継のない時代ですからね。雨が降って冷たい中でゴールで待っていましたら、なかなかうちの5区の吉井（健彦）君が上がってこないんです。審判員が「どこかで倒れているんだろう。小田原提灯でも持って探しにいけ」と言ったんです。僕、そのとき（中略）「吉井は必ず上がってくるから、倒れてなんか絶対いない」と審判員に言ったんです。

そして、誰もいなくなったゴールに彼が本当にふらふら入ってきたんだけど、最後に僕が声かけたら、吉井が僕の胸の中に飛び込んできたんです。一緒に来ていた女子の部員が来たのは5分ぐらいたってからですかね。多分、吉井選手自体も自分がどうやってゴールしたか記憶がないというぐらい、あれじゃないかと思って。」

東京学芸大学は近年、箱根駅伝に出場する機会は得られていない。それでも鈴木さんは毎年立川で行われる予選会に足を運び、応援し続けてくださっている。今年、東京高等師範学校が前身である筑波大学が20位とはいえ箱根駅伝に出場できたことも希望の一つになっているようだ。

この「学大スポーツ」は2020年1月10日発行の148号で残念ながら休刊となる。鈴木さんは、学生の手によって「学芸大学スポーツ新聞」が生まれることを、あるいは東京学芸大学の大学新聞が復刊することを願っている。

おわりに

およそ3時間という長時間、鈴木さんからは学生時代のお話をはじめとして様々なお話を伺うことができた。紙面の都合上、すべてを詳らかに記載することが出来なかったことをおわびしたい。だが、今後もこの鈴木さんを皮切りに様々な卒業生や元本学教職員などから聞き取り調査を行い、将来的に東京学芸大学オーラルアーカイブズを構築出来たら望外の喜びである。

末筆ながら、快く聞き取り調査に応じて下さった鈴木禹志さんに感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

遠藤満雄 2007 「若草もゆるの生まれ方」 作詞・作曲・編曲者を訪ねて 真山茂樹編『辟雍』4、pp.4-9
東京学芸大学二十年史編集委員会編 1970 『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』
星野安三郎先生古稀記念論集刊行委員会編 1992 『平和と民主教育の憲法論—星野安三郎先生古稀記念論文集—』 勁草書房
三鷹市 HP <https://www.city.mitaka.lg.jp/>（最終確認日 2020年2月17日）
山崎真秀 1994 『憲法と教育人権』 勁草書房

注

- i 東京学芸大学二十年史編集委員会編 1970『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』、p.34
- ii 1968年東京学芸大学社会科卒。ジャーナリスト。元毎日新聞社。インタビュー当時は辟雍会の副会長を務めていた。
- iii 遠藤満雄 2007「『若草もゆるの生まれ方』作詞・作曲・編曲者を訪ねて」真山茂樹編『辟雍』4、p.6
- iv 東京学芸大学二十年史編集委員会編 1970『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』、p.35
- v 当時、学内で売られていた牛乳が1本18円だったという。

令和元年度活動報告

〔主な活動・成果〕

- ・ 大学史資料室今後の計画の策定
- ・ 室員会議（11 回）
- ・ 運営委員会（2 回）
- ・ 「撫子会」資料群の目録と資料を公開
- ・ 「青山師範学校」資料群の目録と資料を公開
- ・ 「豊島師範学校」資料群の目録と資料を公開
- ・ 資料閲覧室の開設と運営
- ・ 旧師範学校アーカイブズシステムの公開と運用
- ・ 大学史資料室展示会の開催（R1.11.25 ～ 12.9）
「學藝アルバム 遊びのなかの学び ―附属幼稚園の歩みと保育の継承―」
- ・ 新企画展示会「今月の學藝アルバム」を開始
- ・ 大学史資料室案内リーフレットを作成・配布
- ・ 大学史資料室報（Vol.7）を発行
- ・ 資料環境の維持
 - 大学史資料室保存環境調査報告（1 回）
 - データロガーの設置による温度・湿度の測定
 - フェロモントラップの設置による虫害虫の捕獲調査
 - 微生物センサによる浮遊菌測定
- ・ 50 年史関連資料の目録作成（継続）
- ・ 資料の収集

〔委員会等及び委員名簿〕

運営委員会

- | | |
|--------|----------------------|
| ◎ 川手圭一 | 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授 |
| 君塚仁彦 | 総合教育科学系教授 |
| 新免歳靖 | 自然科学系講師 |
| 服部哲則 | 自然科学系講師 |
| 狩野賢司 | 附属学校運営参事 |
| 清水宣彦 | 総務部長 |
| ◎ は委員長 | |

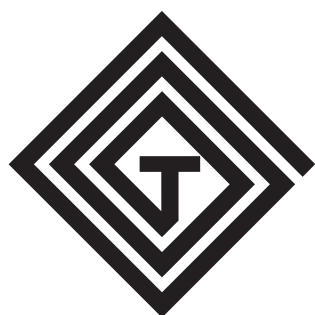
室員会議

- | | |
|--------|----------------------|
| ◎ 川手圭一 | 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授 |
| ○ 君塚仁彦 | 総合教育科学系教授 |
| 及川英二郎 | 人文社会科学系教授 |
| 椿真智子 | 人文社会科学系教授 |
| 藤井健志 | 人文社会科学系教授 |
| 服部哲則 | 自然科学系講師 |
| 金子真理子 | 次世代教育研究センター教授 |
| 木暮絵理 | 専門研究員 |
| 松本功 | 事務室長 |

◎は室長 ○は副室長

東京学芸大学大学史資料室報 Vol. 7

令和2年3月31日発行
東京学芸大学大学史資料室
東京都小金井市貫井北町4-1-1
メール：shiryou@u-gakugei.ac.jp



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

